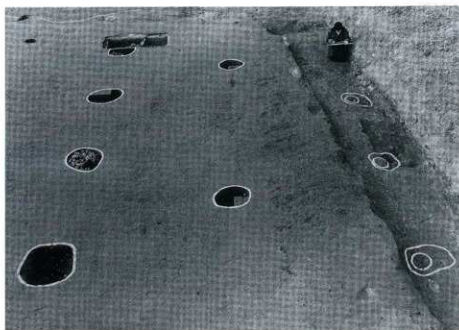


栗東町埋蔵文化財発掘調査

1994年度 年 報



栗東町教育委員会

財団法人栗東町文化体育振興事業団

表紙の写真：野尻・伊勢遺跡 大型掘立柱建物跡
上鈎遺跡 中世の扉

例 言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が受託した、1994年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助調査および町事業調査の概要である。
2. 調査にあたっては滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が調査主体となり、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。尚、国庫補助調査および、町事業調査は、栗東町教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

栗 東 町 教 育 委 員 会	社会教育課	課 長	杉 江 功 三
	文化財保護係	係 長	原 田 上
		主 査	清 水 好 洋
		主 事	松 本 正 人
財団法人栗東町文化体育振興事業団	埋蔵文化財発掘調査課	課 長	竹 村 利 三
	総務課	主任主事	吉 川 素 子
	調査担当	大 崎 隆 志	近 藤 広 雨 森 智 美
		佐 伯 英 樹	猿 向 敏 一 藤 岡 英 礼

4. 本書の作成は、調査内容については各調査担当者が行い、編集を執筆者の意向のもとに佐伯が行った。
5. 各調査内容中の調査地位位置図は、スケールを指定しているもの以外はすべて、5千分の1である。
6. 調査参加者

現地調査作業	青 木 タキ子	池 田 清 子	石 原 恵 子	伊勢村 しずえ
	井 上 恵 子	井 上 妙 子	井 上 良 子	今 村 梅 子
岩 倉 高 征	植 田 康 平	上 田 和 江	榎 戸 菜津子	大 平 有 香
	大 岡 道 代	大 角 貴 則	太 田 好 枝	大 木 下 政 子
鹿子島 美津子	川 崎 う た	川 辺 実樹子	北 野 ふみえ	国 松 厚 史
	久 徳 良 子	教 野 妙 子	国 松 好 子	駒 井 正 史
国 松 かよこ	清 水 宏 行	清 水 裕 一	清 水 裕 一	洪 江 享 一
	齊 藤 幸 美	橘 井 一 二 美	竹 村 ヒロ子	千 代 清 美
園 田 紀代美	辻 井 義 信	中 川 義 信	德 住 映 子	德 地 久 弥
	塚 本 由美子	中 川 義 信	中 野 久 子	西 村 智 祐
富 岡 たよ子	西 田 百 合 子	牧 野 富 子	前 田 浩 尚	平 松 しず子
	藤 原 恵 美	堀 部 アキ子	前 田 浩 尚	宮 川 学 と
森 智 美	森 野 靖 子	薬師川 恵	奥 村 美枝子	横 山 こ と
	岩 根 隆 子	大 橋 美 和 子	奥 村 美枝子	木 村 三 津 美
整 理 作 業	長 濱 恵美子	福 村 賀 世 子	古 田 久 子	宮 島 八 重 美

目次

例言	1	小柿遺跡	47
目次	2	手原遺跡	49
事業報告	3	坊袋遺跡	50
遺跡位置図	4	安養寺遺跡	52
受託事業調査一覧表	7	辻遺跡	54
霊仙寺遺跡	8	辻遺跡	55
純遺跡	10	高野遺跡	56
純遺跡	12	高野遺跡	62
野尻遺跡	14	中村遺跡	64
野尻遺跡	20	純遺跡	65
野尻遺跡	26	辻遺跡	66
下鈎遺跡	30		
下鈎遺跡	32	国庫補助事業調査	
下鈎東遺跡	36	町事業調査一覧表	67
上鈎遺跡	37	上砥山古墳群	68
上鈎遺跡	40	野尻遺跡	69
中沢遺跡	42	高野遺跡	70
小柿遺跡	45	和田古墳群	71
小柿遺跡	46	職員の活動記録	72



整理室のお昼前

事業報告

1. 発掘調査事業

- 今年度受託件数：23件
- 国補・町事業への職員派遣件数：4件

2. 普及・啓発事業

現地説明会（栗東町教育委員会共催）

○遺跡：辻・高野遺跡

期日：4月16日（土）PM2：00～

内容：縄文時代の柱穴など

参加者：36名

○遺跡：辻・高野遺跡

期日：2月18日（土）PM2：00～

内容：地震（噴砂）跡や祭祀具（平安）が出土

参加者：60名

○遺跡：縄遺跡

期日：8月7日（日）AM10：00～

内容：鎌倉時代の屋敷跡

参加者：32名

○遺跡：野尻遺跡

期日：12月17日（土）PM2：00～

内容：弥生時代の大形掘立柱建物跡

参加者：154名

○「おもしろ歴史教室」

期間：平成6年5月14日（土）～11月12日（土）

会場：栗東町大字荒張他（計5回）

内容：実際に古代の米づくりに挑戦し、その技術や知恵を体験する中で、古代から私達の生活と文化に大きな影響を与え続けてきた米と米づくりへの歴史的認識を深めていただいた。

参加者：22名

○発掘調査成果展

（栗東町教育委員会・歴史民俗博物館共催）

期日：11月27日～1月16日

会場：栗東歴史民俗博物館

内容：1993年度の主要な調査成果を展示

参加者：1345名

○スライド報告会

（栗東町教育委員会、歴史民俗博物館共催）

期日：12月10日（土）PM2：00～

会場：栗東歴史民俗博物館

内容：1993年度の主要な調査をスライド映写により紹介

○冊子等の発刊

・栗東町埋蔵文化財発掘調査「1993年度年報」

・パンフレット「はっかつ'94」栗東町

話題の発掘調査

・栗東町文化財ブックレットVol.1「やさしい考古学」



高野遺跡 現地説明会



野尻・伊勢遺跡 現地説明会

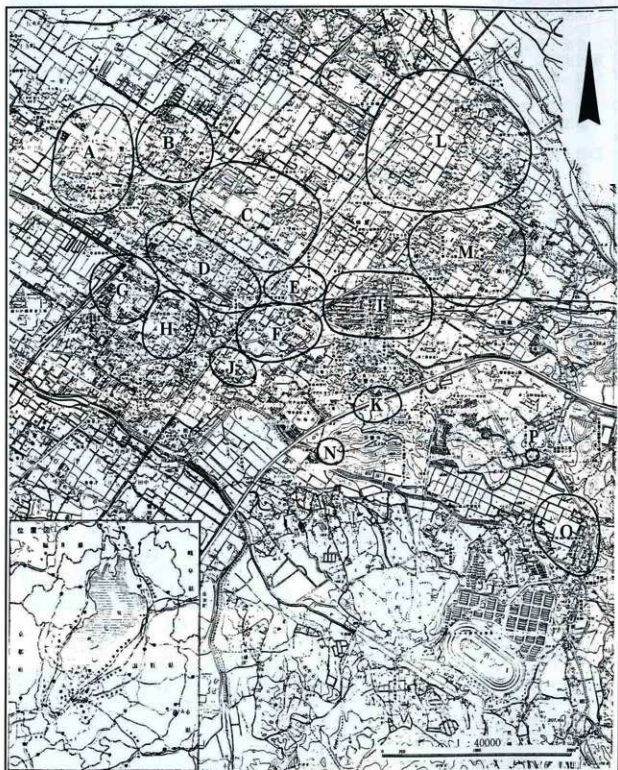


成果展 展示説明



スライド報告会

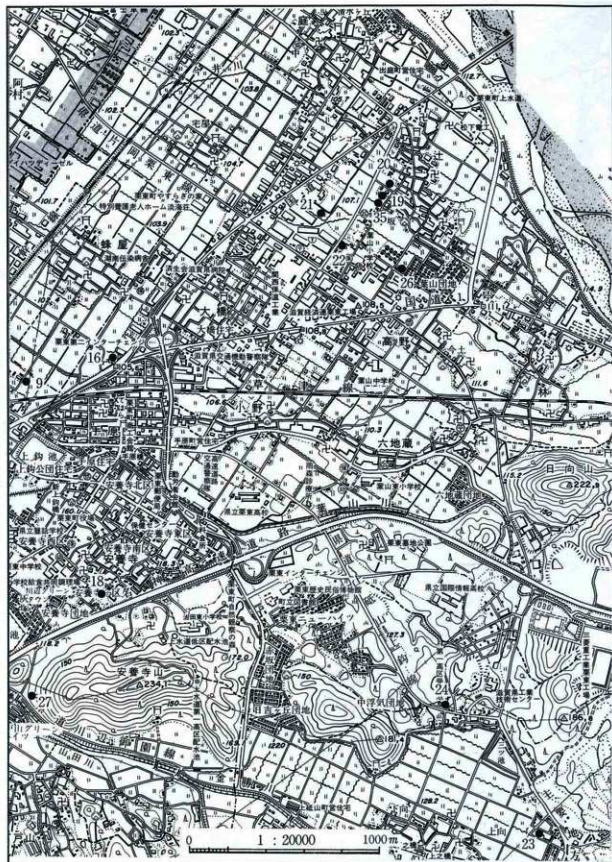
遺 跡 位 置 図



- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| A 靈仙寺遺跡 | E 下鉤東遺跡 | I 手原遺跡 | M 高野遺跡 |
| B 總遺跡 | F 上鉤遺跡 | J 坊袋遺跡 | N 和田古墳群 |
| C 野尻遺跡 | G 中沢遺跡 | K 安養寺遺跡 | O 中村遺跡 |
| D 下鉤遺跡 | H 小柿遺跡 | L 辻遺跡 | P 上砥山遺跡 |



遺跡位置図 ①



遺跡位置図②

財団法人栗東町文化体育振興事業団 埋蔵文化財発掘調査

94年度受託事業調査一覧表

遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
1 霊仙寺	小平井	工場建設	河川・溝(弥)、溝(奈)、掘立柱建物・溝・井戸(平)	縄文・弥生土器・管玉(古)、須恵器(古～奈)、硯・瓦(奈)、黒色土器・土師器・陶磁器(平～鎌)	8.9	佐伯
2 庵	北中小路2-1	造成工事	掘立柱建物・溝・井戸・土坑(鎌～室)	黒色土器・土師器・陶器・瓦質土器(鎌～室)	10.11	雨森
3 庵	庵字西浦638-3・4	道路改良工事	土坑・溝・井戸(中)、暗渠(近)	陶器(中)、須恵器・土師器・黒色土器	12.13	猿向
4 野尻	野尻字餅田403-1他	区画整理事業	掘立柱建物・土坑・溝(中)、噴砂(近)	弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、緑釉、銭貨、ガラス小玉	14.19	猿向
5 野尻	下鉤字上未竹865-2他	区画整理事業	掘立柱建物・土坑・水路・溝(古)、土坑・溝・耕作痕(鎌)	須恵器・土師器・黒色土器	20.25	猿向
6 野尻	野尻380-2他	道路新設	河川(弥～中)、掘立柱建物(弥)、土坑(明)	弥生土器、土師器(古～中)、黒色土器・陶器(中)、瓦・硯・石筆・陶器(明)	26.29	佐伯
7 下鉤	下鉤字奥屋敷606-1他	分譲住宅造成	掘立柱建物・溝・井戸(中)、溝(近)	弥生土器・黒色土器・瓦器	30.31	藤岡
8 下鉤	下鉤229-1他	倉庫建設	堰・旧河道(古)、旧河道(奈)	須恵器・土師器・埴材・木器	32.35	藤岡
9 下鉤東	下鉤22-1	送電鉄塔建設	溝(奈～平)	須恵器(奈～平)	36	雨森
10 上鉤	上鉤140-1	倉庫棟新築	旧河道(古)、掘立柱建物・溝	須恵器・土師器	37.39	藤岡
11 上鉤	上鉤字寺内275-1	共同住宅建設	掘立柱建物・溝・土坑(鎌)	黒色土器・土師器・青磁・木製品(鎌)	40.41	雨森
12 中沢	中沢字大將軍254-1・3	宅地造成	溝(弥～古)、掘立柱建物・土坑(鎌)	弥生土器、黒色土器・瓦器	42.44	藤岡
13 小柿	小柿310-5	道路建設造成工事	流路(弥)、掘立柱建物(奈)	弥生土器、須恵器	45	大崎
14 小柿	小柿字倉田306-1	共同住宅建設	堅穴住居、方形周溝墓、旧河道	弥生土器・石鏃	46	大崎
15 小柿	中沢108番地	区画整理事業	流路(平)、掘立柱建物・溝(中)、井戸(近)	黒色土器・土師器・瓦器・陶器・硯(中)	47.48	雨森
16 手原	手原6丁目226他	浄化槽工事	掘立柱建物(奈～平)	須恵器・土師器(奈～平)	49	雨森
17 坊袋	目川字大鳥井	幼稚園移築工事	方形周溝墓・流路(弥)	弥生土器	50.51	大崎
18 安養寺	安養寺735・737	造成工事	堅穴住居・掘立柱建物(奈)、溝・井戸(中)	須恵器・土師器・信楽焼・瓦	52.53	藤岡
19 辻	辻字小坂西414	共同住宅建設	土坑・土器棺(縄)、方墳(古)、流路、井戸	縄文土器、須恵器、土師器、円筒埴輪	54	大崎
20 辻	辻字小坂西412	共同住宅建設	堅穴住居・掘立柱建物・溝・土坑(飛)	須恵器・土師器	55	大崎
21 辻・高野	高野地先	区画整理事業	土坑・ピット(縄～近)、堅穴住居・掘立柱建物(古～平)、旧河道・溝(古～近)、噴砂	土器・石器(縄)、須恵器(古平)、土師器(古～鎌)、黒色土器、緑釉、灰釉・木器(平)、瀬戸・美濃・信楽焼(室)	56.61	近藤
22 高野	高野字下戸別当577-1他	事務所・倉庫建設	堅穴住居・土坑(古)	須恵器・土師器・石器	62.63	大崎
23 中村	御園字谷2053他	民間住宅造成	溝(近)	木片	64	大崎

93年度から継続の受託事業調査

遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
34 庵	庵字中ノ橋	共同住宅建設	溝欄(古)	須恵器・土師器	65	雨森
35 辻	辻字小坂西415-2	宅地造成工事	掘立柱建物、土取り痕(江)	縄文土器、須恵器、土師器	66	大崎

遺構覧では、下記の略号を用いた。

(縄) 縄文時代、(弥) 弥生時代、(古) 古墳時代、(飛) 飛鳥時代、(白) 白鳳時代
(奈) 奈良時代、(平) 平安時代、(鎌) 鎌倉時代、(室) 室町時代、(江) 江戸時代
また、時代が特定できない場合は(中) 中世、(近) 近世などと表すことがある。

① 霊仙寺遺跡

調査地 栗東町大字小井315-11他

調査期間 1994年7月7日～9月27日

調査面積 1350㎡



調査地位置図

霊仙寺遺跡ではこれまでの調査により、主に縄文時代中期・弥生時代前期・中期中葉の遺構・遺物が確認されており、町内でも比較的早くから開発のなされたことが周知されている。中でも91年に調査された3条の平行して掘られた溝（前期後葉～中期）は集落を囲郭する施設の可能性が指摘されており注目される。

一方今回の調査地は、試掘時に古代の瓦が出土していることや、「堂ノ西」という小字名等から寺院関連遺構の出土が期待された。調査成果の概略は以下のとおりである。

弥生時代後期後葉

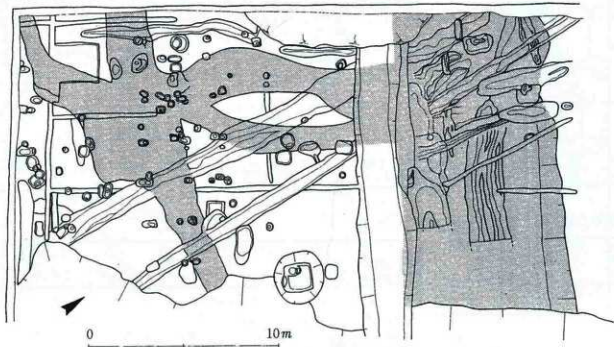
幅9m、深さ1.2mの河川SD-34及び、溝数条を確認した。河川と溝の間には中世の溝が存在するためその関係は判然としないが、溝は一部断面V字に掘られるなど人工的なものであり、さらに3条の溝が合流する地点では縦杭と横木による護岸状施設を伴う幅3m、深さ1.5mの水溜がある事などを考慮すると、河川から導水した農業用水路等であろう。

7世紀末～8世紀

南北方向に並走する幅1.3m、深さ0.35mの溝や柱穴等を確認した。溝からは各種須恵器や瓦が出土した。また、調査区北端では完形品ではないものの円面硯を埋納した小穴（P-68）が存在する。当該期の建物跡は確認できなかったが、並走する溝からの遺物は西側のSD-28の出土が圧倒的に多いので、調査区西側に遺構の広がりが予想される。

12世紀末～13世紀

3間×2間・28㎡の掘立柱建物、幅2.5m・深さ0.5mの溝、井戸が出土。井戸の掘方上面は円形で径2.7m、検出面から1mほどで方形となり底部は1.2mを測る。井戸枠等は抜かれたのか存在しなかった。

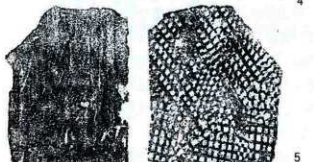
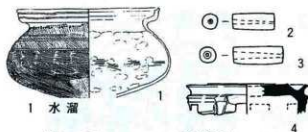
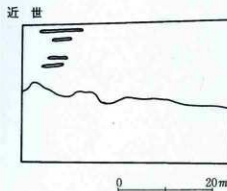
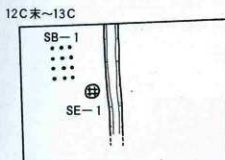
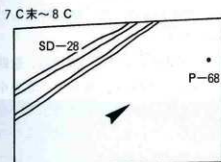
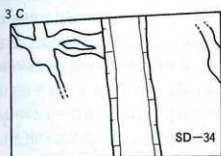


調査区西側主要遺構図（アミ目は弥生時代の水路と川）

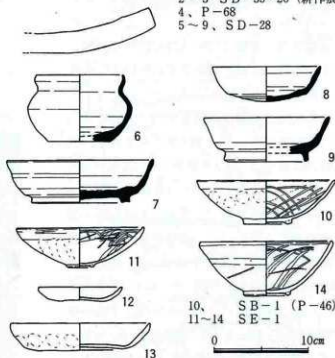
近世 耕作痕数条と河川跡を検出、耕作痕からは碧玉製管玉が3点出土している。

以上が簡単な調査の所見であるが、これまで未確認であった弥生後期の遺構が出土。さらに、多数の瓦や円面硯など寺院跡の存在を思わせる遺物の出土をみるなどの成果を得た。

(佐伯)



2・3 SD-35・20 (耕作痕)
4、P-68
5~9、SD-28



南西側調査区

② 縄 遺 跡

調査地 栗東町大字北中小路2-1

調査期間 1994年6月17日～8月12日

調査面積 784㎡

縄遺跡は、中山道の西側一帯に広がる、弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。今回の調査区は遺跡の北半部にあたり、当該地を境にして北側には弥生時代の方形周溝墓群が、南側には中世から近世にかけての集落が広がっている。

今回の調査では弥生時代の周溝墓はみつからず、周溝墓群の範囲の一部が明らかになったといえる。

発見された遺構は13～14世紀代の屋敷跡である。屋敷跡は13世紀後半と14世紀代の2時期の変遷をおうことができる。

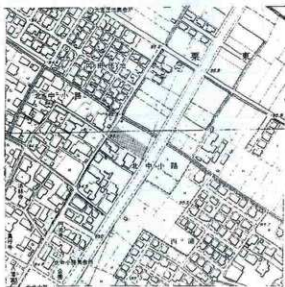
13世紀代の屋敷は、調査区内で2区画みられ、小規模な溝によって区画されている。北西側の区画では、掘立柱建物2棟（SB-1・2）がみられる。SB-1は6間×4間、SB-2は4間×3間で、SB-1→SB-2の順で建てられている。建物群を区画する溝は幅約50～80cm、深さ約20～30cmを測る。北東側の溝は建物の建て替えに伴い、位置をかえている。南東側の区画にも同様に2棟の掘立柱建物（SB-3・4）がみられる。SB-3は5間×3間で、一部張り出した部分のある、L字型の建物である。SB-4は4間×4間の建物である。建物内部に井戸・土塀がある可能性がある。区画溝は幅50～80cm、深さ15～25cmである。両区画の間には、幅約5mの空地が存在する。

14世紀代になると、前段階でみられた2区画が調査区内においては1つにまとまり、調査区の北西および南東側に、規模の大きな区画溝をもつようになる。両側の濠の間には、掘立柱建物4棟（SB5～8）が存在する。SB-5は2間×2間、SB-6は3間×1

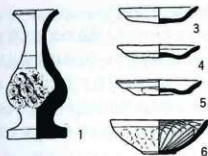
間のいずれも小規模な建物である。付近には焼土窯（SK-7）がみられ、こうした小規模建物は何らかの作業施設であった可能性がある。SB-7は3間×2間で南東側に2間分の張り出しがみられるL字形の建物である。SB-8は4間×2間で南西側に張り出しをもつ掘立柱建物である。SD-1は調査区北西側に検出された溝である。規模は幅150cm深さ40cmである。SD-1は調査区北西隅で東側に屈曲するが、屈曲部の両側で深くなる部分がある。北側の深い部分は1辺80cm×110cmの長方形を呈し、検出面からの深さは116cmで、板材が出土している。SD-1からは、瓦質火舎、土師質釜、古瀬戸系花瓶が出土している。SD-8は調査区南東側で検出された溝である。幅100cm以上で、検出面からの深さは80cmである。

これまでの縄遺跡における調査では、遺跡全体に広がる12～13世紀代の集落と、北中小路集落を囲うように存在する15世紀以降の環濠が明らかになっている。今回の調査区では15世紀以降の環濠の北端部において14世紀代の集落がみつかり、散在していた中世集落から現集落へ移行する過渡期の状況が窺える資料となった。

（雨森）



調査地位置図



1、2 SD-1 出土
3~6 SE-4 出土

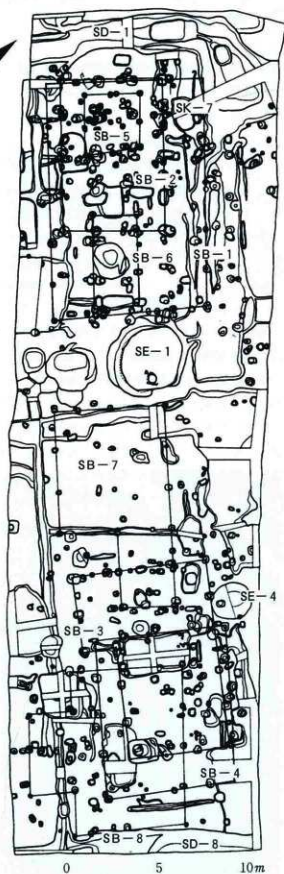


0 5 10m

出土遺物実測図



調査区全景



調査地遺構図

③ 縄 遺 跡

調 査 地 栗東町大字縄字西浦638-3・4

調査期間 1995年2月1日～2月28日

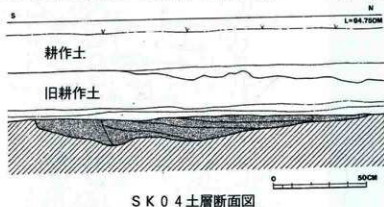
調査面積 158㎡



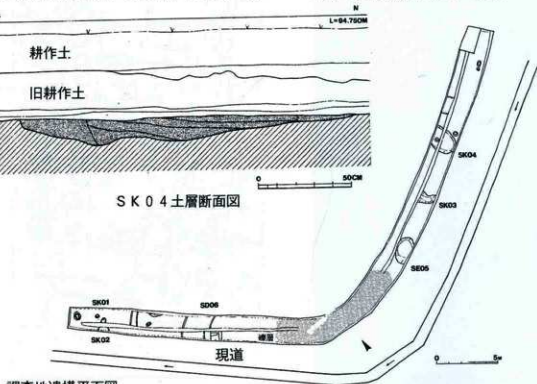
調査地位置図

縄遺跡は、現在の縄・北中小路地区一带に広がる中世期の集落遺跡と周知されている。

過去の調査からは、中世期の土地区画が近世にまで継承されていることが判明している。これは、当地区が旧東山道（近世街道の中山道）に接しており、この地域の中心的な集落であったことを示しているといえよう。時期的には、概ね12世紀～13世紀を中心とする。



SK04土層断面図



調査地遺構平面図

調査地は、90年度調査地（現大宝幼稚園・大宝保育園）と南接する。

掘削にあたっては、現道の改良工事であることから、拡張部のみをその対象地とした。また、その制約から「L」字状のトレンチとなったが、遺構の検出状況から、それぞれ東部・西部・中央部に分けてその概要を述べることにする。

層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると基本的には次の3層である。上層から、層厚40cm程の現代耕作土層、中世期の遺物を包含する層厚8cm程の暗茶褐色系粘質土の盛土層、そして西部の黄橙灰色粘質土層及び東部の暗茶褐色系砂礫層（河川氾濫原）の地山層である。遺構の検出にあたっては、基本的にこの地山層上面で行った。

遺構・遺物 検出した遺構は、鎌倉時代の土壕・溝・耕作痕・井戸のほか、近世以降の土壕・暗渠排水路などがある。

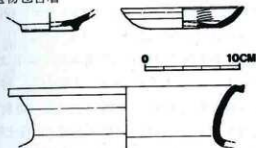
遺物には、須恵器甕・黒色土器碗・土師器皿・白磁碗等の中世陶磁器のほか、古伊万里皿等の近世陶磁器などがある。

SK01 直径0.3m程の柱穴である。いわゆる手の字口縁と呼ばれる土師器皿片が出土。

SK03 東西1m・南北検出長1.2m・深さ0.1m程を測る土壌である。土師器の羽釜が出土。

SK04 東西1.8m・南北検出長2.3m・深さ0.15m程を測る土壌である。地山である鉄分・マンガンを含んだ暗茶褐色砂礫層を穿つ。埋土は、炭・焼土を含んだ暗灰褐色系の粘質土の堆積土層である。遺物的には、2次焼成を受けた中世土器片が少量出土している。

遺物包含層



遺物実測図



調査前現況（南東から）



東部中央完掘状況（南から）

まとめ 西部は、柱穴・土壌などが、鉄・マンガンを含む黄橙灰色粘質土の地山層で検出された。それに対し東部では、鉄・マンガンを含む暗茶褐色砂礫層の河川氾濫原の地山層で、井戸・土壌等を検出したものの、建物の痕跡は認められなかった。

このような状況からは、調査地の西部は、90年度調査で検出した集落の東端部分であり、さらにその東側は、集落の形成は近世期にいたるまでは認められないと言えそうである。今回は河川氾濫原が広がる野尻遺跡と東接することから、縄遺跡内における集落の広がりを見極めることができたといえる。

調査地一帯は、最近の開発集中地区であり調査数も多い。しかし、そのほとんどは前述の街道を中心とした縄遺跡の東端部にあたる。

今後の周辺での調査によってさらに明らかになることに期待したい。

（猿向）



西部完掘状況（北西から）

④ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字野尻字餅田403-1 他

調査期間 1994年4月1日～1994年9月30日

調査面積 2,107㎡

野尻遺跡は、標高1,200m程の鈴鹿山系から源を発し琵琶湖へ西流する旧野洲川が形成した標高100m程を測る扇状地の扇端と氾濫原との境に位置する。過去の調査成果からは、縄文時代後期から近世期にいたる遺構・遺物を確認しているが、その中心は弥生時代末から古墳時代初め、および平安時代末から鎌倉時代前半の2時期にあることが判明している。

88年度の調査では、一辺約50mの方形溝で区画された古墳時代の居館跡を発見し、当時の古代豪族を知るうえで重要な知見を得た。93年度の調査では、北接する弥生時代後期の大集落である守山市の伊勢遺跡にあたる大型掘立柱建物群の1棟と方形周溝墓1基を発見している。

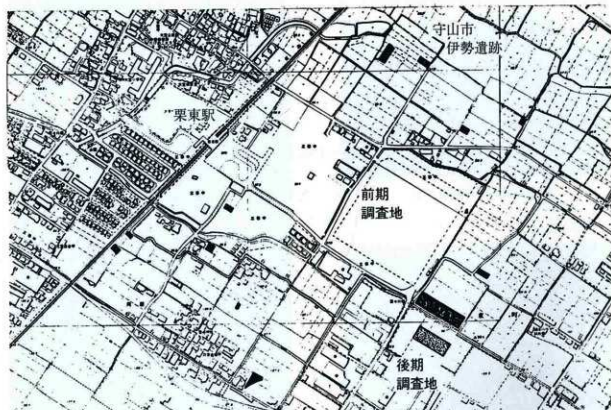
今回の調査は、JR東海道本線栗東駅前土地区画整理事業の第六期工事に伴う発掘調査である。今年度は保留地、および中央部東端の道路部分の約7,500㎡がその対象となった。

調査にあたっては、対象地を前期と後期に分け行った。ここで報告するのは、前期調査対象地の約5,900㎡である。

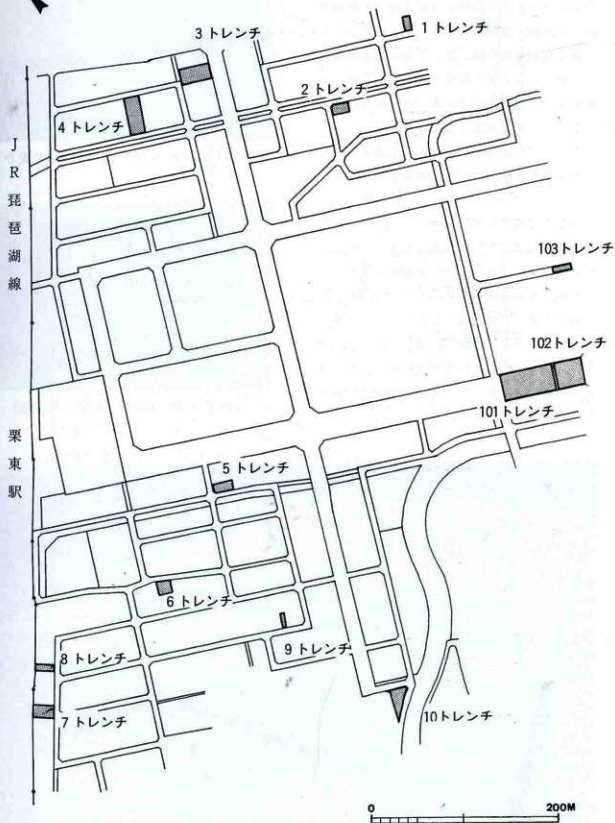
掘削にあたっては、調査対象地にあわせ、保留地には1～10のトレンチを、道路部分については101～103のトレンチを設定した。また、101トレンチは対象地の制約から、西部・中央部・東部に分け、101-Wトレンチ・101-Cトレンチ・101-Eトレンチとした。

層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると次の3層である。上層から、層厚20cm程の現代耕作土、古墳時代後期の遺物を包含する層厚15cm程の灰色系粘質土の盛土層、そして黄灰色粘質シルト層の地山層である。

遺構の検出にあたっては、基本的にはこの地山層上面で行った。



調査地位置図 (1 : 7,500)



トレンチ配置図

遺構 検出した遺構は、古墳時代の土壇・溝・掘立柱建物、および鎌倉時代の土壇・溝・耕作痕のほか、近世期の井戸状遺構・暗渠排水路・耕作痕・地震跡（噴砂）などがある。区画整理対象地全域に広がる保留地にあたる1～10トレンチは、遺構の検出状況等から、各地区での過去の調査成果とその様相は変わらない。今回は割愛することとする。

ここでは、道路部分にあたる101トレンチの主要遺構について、その概要を述べる。

（101トレンチ）

旧地形は東から西へと緩やかに傾斜するが、調査地の現状は平坦な水田である。これは、中世期および近世期による生産地拡大のための土地改変の結果であり、トレンチ東側では、現耕作土直下で地山層となる。

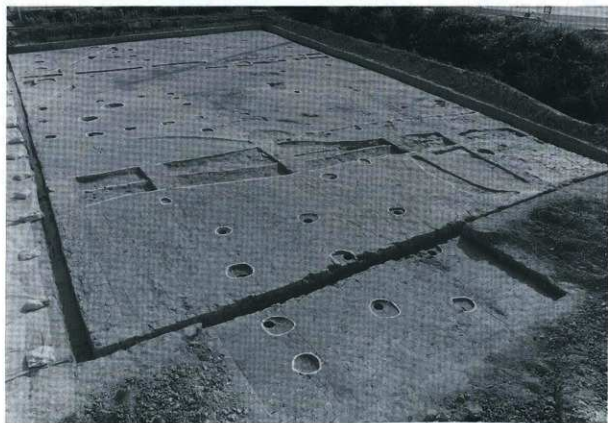
しかしながら、遺構的にはトレンチ全体にその広がりが認められることから、ここでは各トレンチを一括して、主要な遺構についてその概要を述べることにする。



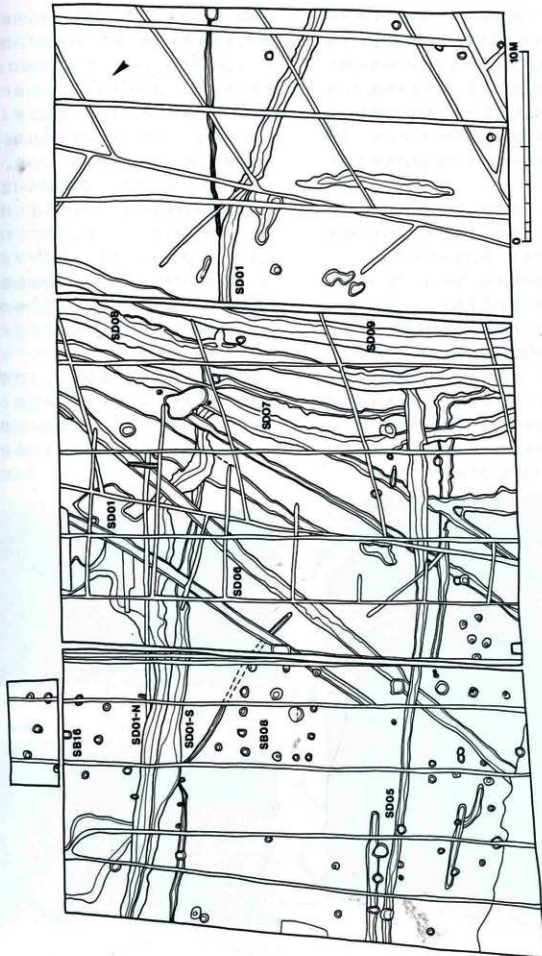
101-Wトレンチ SB16 完掘状況（北東から）



SB16 柱穴 遺物出土状況（東から）



101-Wトレンチ 完掘状況（東から）



101-Wトレンチ

101-Cトレンチ

101トレンチ 遺構図

101-Eトレンチ

SD01-N 検出長50m・幅0.6~1m・深さ0.2m程を測る古墳時代の溝である。中央部で、東西7m・南北5m・深さ0.8m程の不定形な土壌状となる。埋土は中央部で、大きく2層に分けることができる。下層は、茶褐色系と灰色系の粘土で埋没時のもの。上層は、暗茶灰色系シルトで埋没後の堆積と思われる。

SD01-S 検出長23m・幅1m・深さ0.2m程を測る古墳時代の溝である。埋土は灰褐色粘質土である。SD01-Nより古い。

SD07 検出長25m・幅1.2m・深さ0.2m程を測る古墳時代の溝である。

SD08・09 検出長25m・幅1.2m・深さ0.2~0.6m程を測る鎌倉時代の溝で、埋土は、灰色系の粘土・粘質土・シルト土層からなる。遺物はシルト層より出土。状況から、用水路としての役目を担っていたものと考えられる。

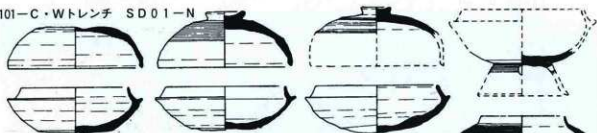
SD08からはガラス小玉が、SD09からは元豊通宝(初鑄1078年)が出土している。

SB08 桁行4.5m(3間)・梁行3.3m(2間)を測る東西棟建物である。柱掘方は、径0.3~0.5m程を測る円形掘方である。埋土は、暗茶褐色粘性土である。柱痕跡は径0.2m程を測る円形であり、埋土は暗灰色粘性シルトである。柱材が残っているものもみられた。柱間距離は、桁行・梁行とも不揃いである。

SB16 東西3.9m(2間)・南北3.3m(2間)を測る総柱建物である。柱掘方は、径0.4~0.5m程を測る隅丸方形掘方である。埋土は、暗灰色粘質シルトである。柱痕跡は径0.2m程を測る円形であり、埋土は暗茶褐色粘質土である。柱痕跡内から、6世紀前半の須恵器の杯が出土した。柱間距離は、桁行・梁行とも不揃いである。

遺構の検出状況や規模・配置から、2時期が想定することができる。しかし、後述するように出土遺物の検討からは、時間的な大差はないと判断され、概ね同一時期のものと考えてよいだろう。

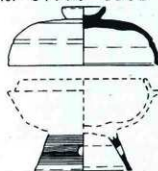
101-C・Wトレンチ SD01-N



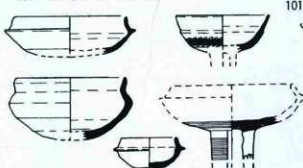
101-Wトレンチ SD01-S



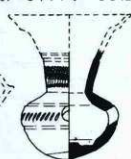
101-Cトレンチ SD02



101-Cトレンチ SD07



101-Cトレンチ SD12



101トレンチ 土器実測図

遺物 出土した遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・輸入陶磁器等の土器のほか、少量の石鏃・銭貨・ガラス小玉などがある。

量的にはコンテナー8箱分程であり、その8割程度が、S D01・07等より出土した古墳時代6世紀後半頃の須恵器・土師器類である。ただし、土師器類はその出土遺構の特性から、遺存状況が悪く細片のことが多い。

以下、図示した主要な遺構の出土遺物について、簡単な補足を述べることにする。

S D01・02・07等からは、基本的に同様の器種構成のものが出土している。須恵器では、杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・短頸壺である。土師器は前述のとおり、細片のものがばかりである。これらは、埋土の下層より出土したもので、遺構埋没時のものと考えられる。

遺構の重複関係からは、古墳時代後期に2時期を想定することができる。しかし、これら出土遺物の検討からは時間的な大差はなく、概ね同一時期のものと考えてよいだろう。



101-C トレンチ 遺構検出状況（北東から）



101-C トレンチ 遺構完掘状況（東から）

まとめ 以上、調査の概略を述べた。最後に若干の整理を行いまとめとしたい。

野尻遺跡では、過去の調査成果から、東西方向に延びる旧野洲川氾濫原と広域な沼沢地が、遺跡内に広がっていると予想されていた。栗東駅周辺部におけるこれまでの調査成果も、大局的には現耕作土直下において、中世・近世期の整地層および、滞水性粘土の地山層が厚く堆積する状況を呈しており、このことを補強する。

しかし、今回の調査地は、立地的に河岸段丘上位に位置し、前述のとりの調査成果を得ることができた。93年度には、弥生時代後期の方形周溝墓や銅鏃・鋤を出土した大溝、そして古墳時代後期前半の祭祀遺構・掘立柱建物・溝等を検出している。

対象地の制約から広範囲の調査地の設定が行えないものの、今後、周辺の河岸段丘上位での調査が進むにつれて、野尻遺跡の様相が明らかになることに期待したい。（猿向）



102 トレンチ 噴砂検出状況（南西から）

⑤ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字下鉤字上末竹865-2 他
 調査期間 1994年10月1日～1995年3月31日
 調査面積 1,562㎡

今回の調査は、JR東海道本線栗東駅前土地区画整理事業の第六期工事に伴う発掘調査である。今年度は保有地、および中央部東端の道路部約7,500㎡がその対象となった。ここに報告するのは、前期調査分中央部東端の道路部分の南半分にあたる。

掘削にあたっては、対象地に合わせ1～3のトレンチを設定した。

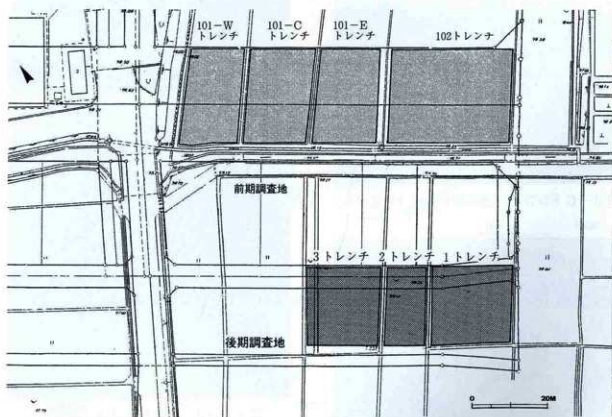
層序 調査地で認められる基本的な層序は、上層から、層厚20cm程の現在耕作土層、中世期の遺物を包含する層厚15cm程の黄灰色系粘質土の盛土層、中世期の遺構ベースである層厚15cm程の黄灰色系粘質土の盛土層、そして黄橙灰色粘質土層の地山層ある。

今回は、中世期以降の遺構面と古墳時代の遺構面を検出した。前者は、黄灰色系粘質土の盛土層において検出した。古墳時代の遺構面については、重複関係および土層層序から2時期が認められたが、調査の都合上今回は基本的に、地山層である黄橙灰色粘質土層の上面で行った。

遺構 検出した遺構には、古墳時代の用水路・掘立柱建物・土壇・溝および、鎌倉時代の土壇・溝・耕作痕のほか、近世期の耕作痕等がある。

前述のとおり、古墳時代および中世期以降の遺構面を検出した。調査にあたって遺構番号は、上層の中世期以降の遺構を1番から、下層の古墳時代の遺構を100番からとした。また、複数のトレンチにわたる遺構については、基本的に同一番号とした。

ここでは、これらの遺構の検出状況等から1～3トレンチを一括して、主要遺構の概要を報告することとする。



トレンチ配置図 (1 : 1000)

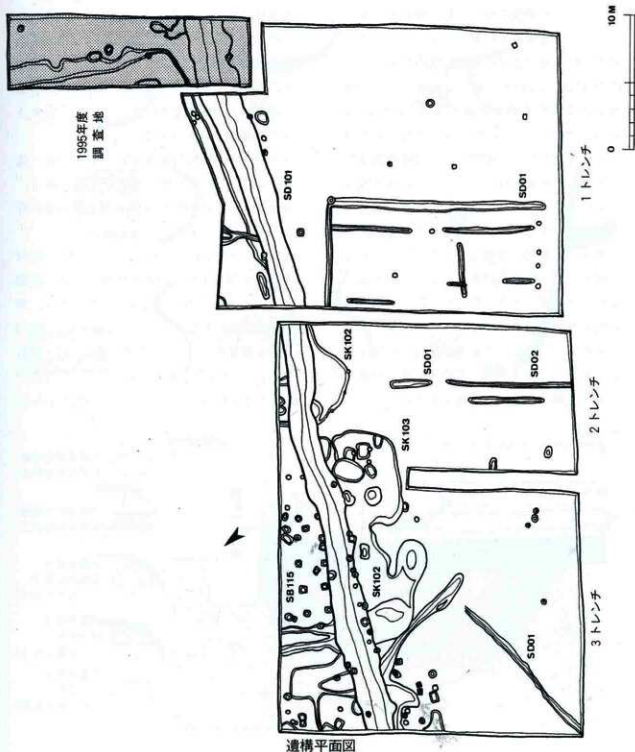
(上層遺構)

中世期以降の遺構は、灰色砂質土を埋土とするもので、トレンチに希薄ながら広がる。

そのほとんどが著しく削平をうけており、一部の柱穴を除き、深さは0.1m程度のものである。内容的には、現在の土地区画に沿った耕作痕・土壌・柱穴である。

SD01・SD02は耕作痕である。幅0.2~0.7m・深さ0.1~0.2m程を測る溝状のもので、現在の土地区画に沿うものである。中世陶磁器の細片が少量ながら出土している。

1 トレンチ南側の柱穴群は、一辺0.2m・深さ0.2m程を測る方形掘方であり、埋土は暗灰色粘土である。近世期のものと思われる。



遺構平面図

(下層遺構)

下層遺構については、前述のとおり、遺構の重複関係および土層順序により、古墳時代後期に2時期が認められる。大溝SD101を主体にそれに伴う溝・小柱穴群からなる一群と、それらより古い掘立柱建物SB115に付属するであろう土壌・柱穴群の一群である。各遺構の時期について整理未了のため即断できないものの、主要遺構の出土土器の検討からは、この2つの遺構群の時期については、さほど顕著な時間差は認められないようである。

SD101 検出長49m・幅2～3m・深さ0.8m程を測る東西方向の大溝である。北側に幅0.5m・深さ0.2～0.6m程を測る南北方向の溝が、5条取り付く。東側は、7次前期調査の1トレンチ南端で検出している。総検出長は55m程に及ぶもので、状況的に農業用水路としての性格を担っていたものと思われる。

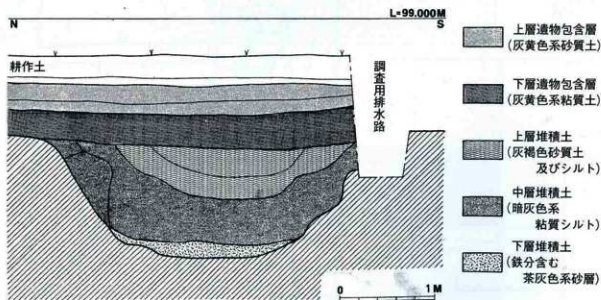
埋土は大局的に3層に分けることができる。上層から、灰褐色系砂質土およびシルト層、暗灰色系粘質シルト、そして、鉄分を含む茶灰色系砂層である。

遺物は主として、中層の廃絶時の堆積土層より集中して出土した。またその後の整地土である上層からも、土器細片が出土している。

2トレンチSK102 東西3m・南北4.5m・深さ0.2m程を測る大型の土壌である。西辺で径0.1m・深さに0.1m程の小柱穴を2間検出した。柱間距離は1.6mを測る。土壌内において、柱穴等の検出を試みたが認められなかった。2トレンチSK103 東西7m・南北4.5m・深さ0.1m程を測る大型方形土壌である。SD101による削平のため、3トレンチSK102との重複関係は不明である。遺物的には、中央より古墳時代後期の須恵器の杯・高杯・甕と土師器の甕が、焼土とともにまとまって出土している。著しい削平を受けているものの、遺構の検出状況や遺物の出土状況からは、堅穴住居の可能性も考えられる。

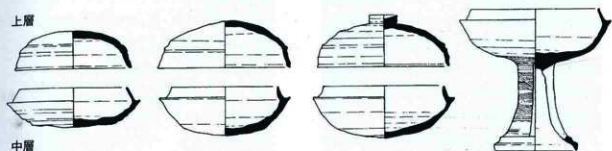
3トレンチSK102 東西4m・南北3.8m・深さ0.3m程を測る大型の不定形土壌である。遺物的には、古墳時代後期の須恵器の器台等が出土している。

3トレンチSB115 桁行5.4m（3間）・梁行3m（2間）を測る総柱東西棟である。柱掘方は、一辺0.4m程を測る隅丸方形であり、埋土は暗茶褐色砂質土である。柱痕跡は、径0.2m程を測る円形である。柱間距離は、桁・梁行とも1.5～1.8m程を測る。SD101による南辺の削平を考えれば、3×3間になる可能性もある。

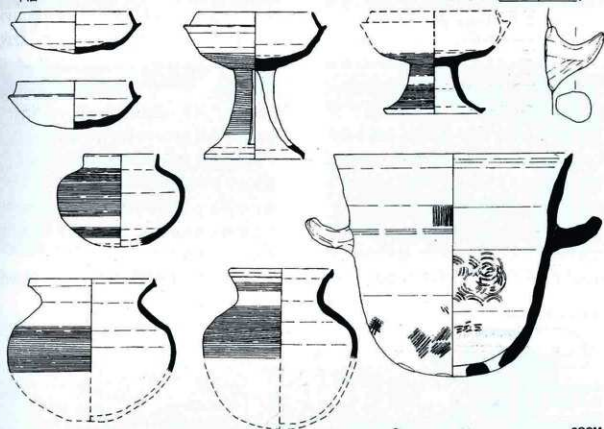


1トレンチ SD101 土層断面図

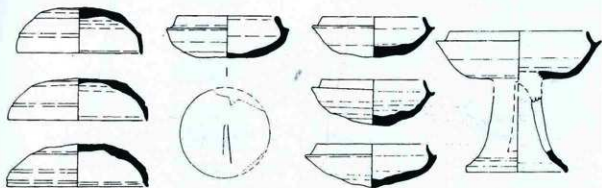
上層



中層



下層



SD101 出土土器実測図

遺物 出土した遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・輸入陶磁器等の土器の他、少量の石鏃などがある。量的にはコンテナ10箱程度であり、そのうち8割程が古墳時代後期中頃の須恵器・土師器類である。ただし、土師器類はその出土遺構の特性から、遺存状況が悪く磨滅が著しく細片のことが多い。

以下、図示した主要遺構の出土遺物の様相について、簡単な補足を述べることにする。

SD101からは、基本的には上・中・下層から同様のものが出土しているが、中層の廃絶時の堆積層出土のものが、量的にも器種構成的にも、もっとも多い。これは状況的に、流れ込んだものではなく、隣接する遺構を反映したものとしてよいだろう。また、上層は、整地土層であることから、中層出土のものより少し古い6世紀前半頃の様相を示す。

2トレンチSK102・103なども、基本的には同一時期のものといえるが、遺構の重複関係の示すとおりSD101よりやや古い様相を示す。

まとめ 以上、調査の概略を述べた。最後に若干の整理を行いまとめとしたい。

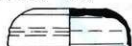
野尻遺跡では、過去の調査成果から、東西方向に延びる旧野洲川氾濫原と広域な沼沢地が、遺跡内に広がっていると予想していた。また、栗東駅周辺部におけるこれまでの調査成果もこのことを補強する。

しかしながら、近年における調査成果からは、今年度の前期調査のように、旧野洲川の河岸段丘上位での調査が進むにつれて、野尻遺跡の様相が一層明らかになってきた。今回の調査地も、今年度前期調査地南側であり、検出された遺構・遺物についても、古墳時代後期6世紀後半頃を中心とした様相を示す。

近年の調査では、広域な対象地に対して、継年度に恒り線での調査を行うことによって、過去の調査では得られなかった野尻遺跡の新たな様相を明らかにしたという大きな成果を得ることができた。

今後のさらなる成果に期待したい。(猿向)

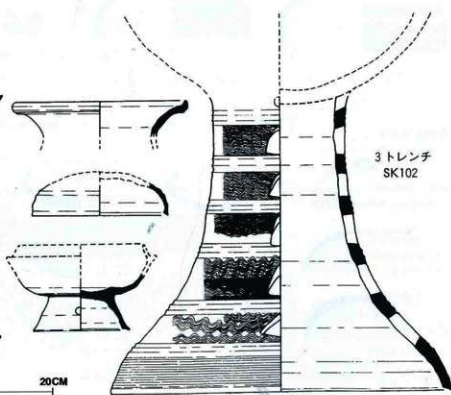
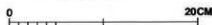
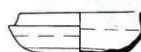
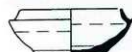
3トレンチ SK04



2トレンチ SK103



2トレンチ SK102



遺物実測図



2 トレンチ SD101完掘状況（東から）



3 トレンチ 上層遺構検出状況（東から）



3 トレンチ SD101土層断面状況（南東から）



3 トレンチ 下層遺構検出状況（東から）



3 トレンチ 遺構完掘状況（東から）

⑥ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字野尻380-2

調査期間 1994年10月6日～1995年3月10日

調査面積 2700㎡

町が計画する道路新設工事に先立つ調査である。調査区の北半部は隣接する弥生時代後期の大規模集落である守山市伊勢遺跡の立地する微高地の南端にあたることから弥生後期の遺構の出土が想定されていた。調査区北半の基本層序は、耕作土下にわずかに黄灰色土の床土を認めるが、包含層は無く床土直下が遺構面となっている。これは土取りに起因するもので、遺構面も削平を受けていると考えられる。一方調査区南半は、野尻遺跡の低地



調査位置図

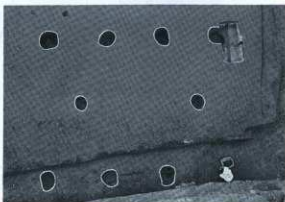
部分に広くみられる土地改良（井戸状遺構）跡のため近世以前の遺構は極めて残りの悪い状態であった。主な出土遺構は弥生時代後期～布留式期にかけての河川跡、中世の土坑・河川跡、明治時代の土坑、近世以降の井戸状遺構である。

掘立柱建物跡SB-1 微高地の南端で確認された建物で、1間×1間、柱間距離は3.2m、面積9.4㎡、壁の東外側1.1mに独立棟持柱を持つ。柱穴は不整形円で25～30cm、深さは30～50cmだが棟持柱のみ浅く10cmであった。小型の高床倉庫であろうか。

掘立柱建物跡SB-3 調査区北端で確認された大型建物で、規模及び構造は桁行3間で6.9m、柱間距離2.3m。梁行き1間で5.3m、面積は36.6㎡である。屋内に2本の棟持柱を持つ。柱穴堀方は55～65cmの不整形円形で、深さは最も深いもので65cmである。柱痕跡は直径25cmで4ヶ所にヒノキ材^①の柱根が残存



SB-3 柱穴



SB-3 完掘状況

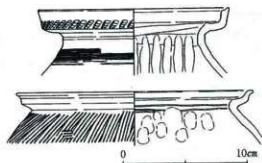
していた。柱穴内の柱側面には径4~10cmの河原石が詰め込まれており、柱の底面には根固めの粘土を貼るものがある。掘方には伊勢遺跡や下鈎遺跡の大型建物に見られる斜路をもたないが、長楕円形の内側に柱を寄せている点は、柱を落とすし込む際の工夫として他と共通する。柱穴からは弥生時代後期後葉の土器片が約140点出土している。この建物の上屋構造は、柱の配置から入母屋造りの屋根^②を持つ高床建物と推定される。

河川跡SR-3 弥生時代後期~布留式期の遺物を出土する河川跡で川岸は井戸状遺構のため北側を確認できなかったが、残存幅は9m、周囲の地形観察から最大でも20m程であったろう。

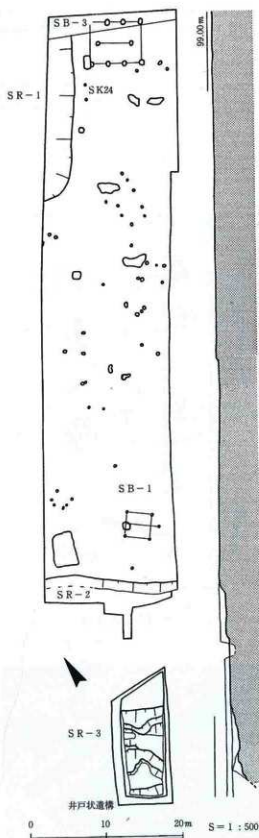
今回見つかった大型建物は、弥生後期では前例の無い形式であり、伊勢遺跡の大型建物群の性格を考える上で重要な位置を占める。また河川跡の確認で居住域の範囲をより具体的に知ることとなった。



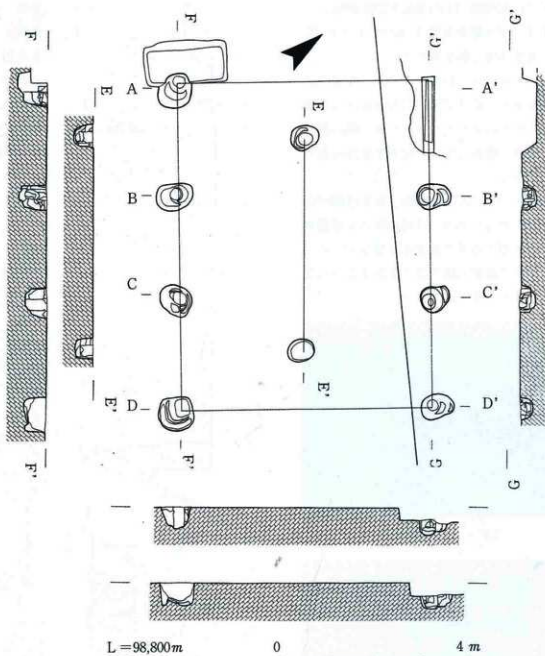
SR-3 完掘状況



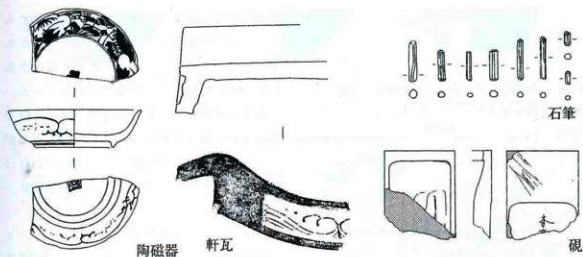
SR-3 出土遺物実測図 S=1:3



北半区 遺構配置平面図・地形断面図



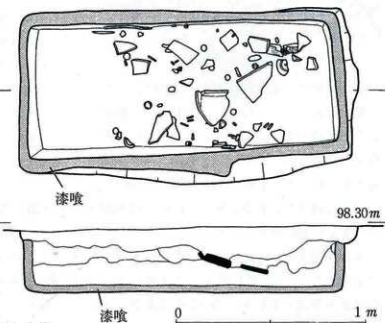
SB-3 平面·断面实测图 $S=1:80$



SK-24 出土遺物実測図 S=1:4

貯蔵穴状遺構 SK-24

大型建物 SB-3 の南西端柱穴を切る遺構で、長辺1.7m、短辺0.8m、深さ0.33mの長方形の土坑で、側面と底部には黄色の山砂を約6cmの厚さで漆喰状に塗り付けている。上部構造は削平のため不明である。埋土は地山の黄色土と旧表土の茶褐色土のブロックで大方4回に分けて埋められている。遺物は主に下層から廃棄された状態で出土した。それらは硯、石筆、瓦、瓦を加工した円盤、ガラス製品、陶磁器類等で、おおよそ江戸末期から明治期のものである。その内図示した石筆は白色・茶色・緑色系の滑石製で、長さは4.5cmから使い込んだもので1.4cm、太さは0.9cmから0.4cmで、底面から16点出土した。調査地点西側の田は「学校田」と呼ばれており、1874（明治7）年創設の月盛学校という小学校があったと伝えられる地であることから、石筆や硯はその小学校で使われたもので、SK-24もそれに関わるものかもしれない。



SK-24 遺構平面・断面図 S=1:20



SK-24を南から見る

(佐伯)
注① バリノ・サーヴェイ株式会社の鑑定による。

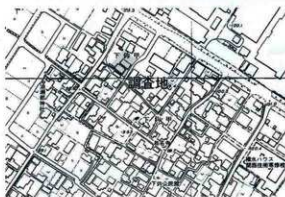
② 宮本長二郎・石野博信両氏から御教示を得た。

⑦ 下 鈎 遺 跡

調 査 地 栗東町大字下鈎字奥屋敷606-1 他

調査期間 1994年8月9日～9月30日

調査面積 400m²



調査地位置図

下鈎遺跡は、縄文時代から江戸時代にいたる複合遺跡であり、総体的に弥生時代や鎌倉時代の遺構が多く認められている。中世に所属する遺構は、下鈎甲の集落周辺で調査が実施されているが、集落の南外れでは12世紀代の掘立柱建物が、集落北端では13から15世紀代の掘立柱建物が検出されている。

集落北端は、「奥屋敷」・「殿ノ後」の小字名を残し、「近江栗太郎志」では蓮台寺氏の邸跡を想定しており、1985年度の調査では土豪居館と見なされる濠状遺構が検出された。

今回の調査は、下鈎甲集落の北端で実施した。基本層序は上層から順に見ていくと、現代の整地層として礫を混入した黄褐色系の粘質土があり、明灰褐色系の粘質土を経て、礫を混入した茶褐色系の粘質土が見られる。黄褐色系の粘質土は、近代の家屋建設の際に盛土されたと思われ、茶褐色系の粘質土は、江戸時代に盛土されたと思われる。江戸時代の地山ベースからは、溝を検出したが建物を特定できなかった。茶褐色系の粘質土を除去すると、礫を混入した灰褐色系の粘質土があり、中世の遺構を確認した。中世の地山ベースも、トレンチ南側一帯が整地層となっている。整

地層からは、礫と共に弥生土器が多数認められた。下鈎甲集落が立地する地形は、北から南にかけて傾斜しており、平坦地を確保するため、各時期を通して整地が行われている。

中世の遺構では、掘立柱建物・溝・井戸を検出した。掘立柱建物は3から4期にまたがり、2×3間以上の規模を持つ。柱穴からは黒色土器等が出土しており、一連の建物は、13世紀代に存在していたと考えられる。

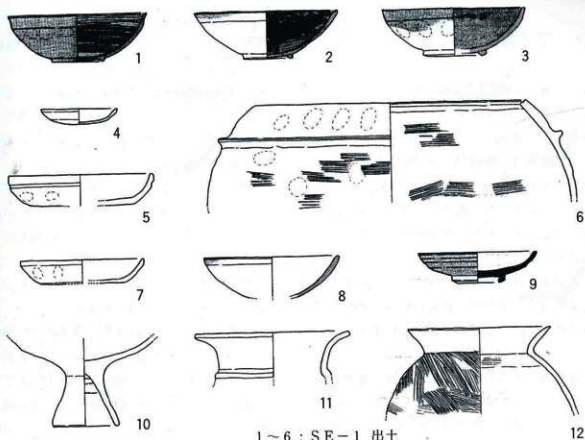
SE-1は、重複関係によれば、SB-1に後出している。掘方の平面プランは直径約3mで、いびつな円形を呈する。検出面から井戸底面までの深さは1.5mで、井戸からは13世紀中頃の瓦器や黒色土器が出土している。

栗太郎は室町時代中頃においても黒色土器が出土遺物の大部分を占める遺跡が多いが、下鈎遺跡は、栗東町内の14から15世紀代に盛行する中世遺跡の中でも、狐塚遺跡と並んで瓦質土器の出土が多いことで知られる。当調査地は時期的にこれに先行しており、SE-1から出土した土器も黒色土器が多く、瓦質土器が集落単位で増加するのは14世紀以降となることが窺える。

中世以降開始された整地は、整地開始時において当調査地に留まったのか、集落全体に及んだかは、今後の調査による判断を待たなければならないが、中世村落が共同体として、村落空間を主体的に所有する時期—集村化の過程や、これ以降の瓦質土器増加に見る土器流通上の特性等を含めて、今後の調査に期待したい。(藤岡)



調査地北東部分



0 10cm

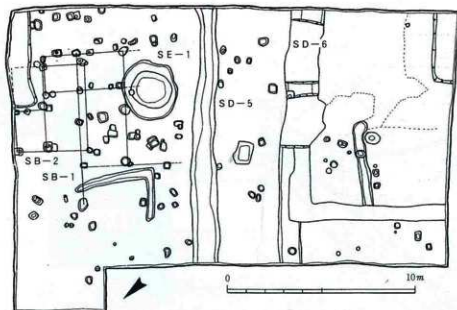
1~6 : SE-1 出土

7~8 : SD-5 出土

9 : SD-6 出土

10~12 : 中世整地層出土

出土遺物実測図



調査地遺構図

⑧ 下 鈎 遺 跡

調 査 地 栗東町大字下鈎229-1、228-1、232-1

調査期間 1994年10月12日～11月25日

調査面積 110㎡

下鈎遺跡は、野洲川と草津川が形成した扇状地の扇央部にある。地形は北に向かって緩やかに傾斜するが、航空写真では旧河道の乱流が判読されており、多くの河川による複合扇状地であることが確認できる。

本調査地は、下鈎遺跡の東端、上鈎遺跡と接する地点にあたり、過去の周辺の調査では弥生時代中期～後期の大型掘立柱建物が発出されている。

調査地の基本層序は上層から順に層厚15cmの耕土と層厚20cmの包含層が見られ、この下層から、旧河道と堰遺構を検出した。旧河道の堆積は、粘質土を中心とするSD-2と、砂質土層を中心とするSD-1があり、堆積状況からSD-2が先行し、堰遺構を包含している。



調査地位置図

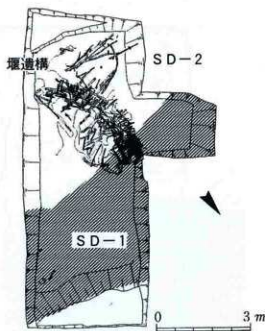
堰遺構は、トレンチの東西幅全体にわたり検出したため全長は未確認だが、最大幅1.5m最大高1.5mの規模を測る。SD-2の河幅が未確認な上に、堰本体が河道下流に向けてやや外湾するため、河道に対する角度を明かにし得ないが、概ね直角に流れを堰止めていたようである。

検出した堰遺構の内、西側は構築部材が途切れていた。本来ならこの付近に耕地への取水口を想定すべきであるが、後世の攪乱により破壊を受けていた。

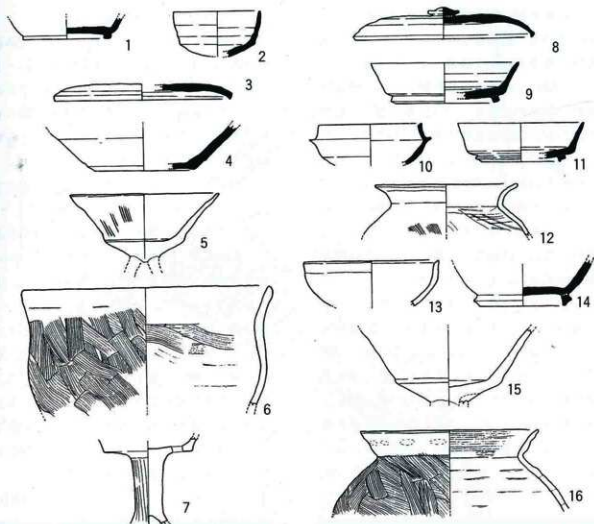
堰の構築手法は大きく分けて2パターンある。以下復原しながら説明する。

①堰端部：ここでは最初に構築部材の基礎として、長さ2～3mの横木を、北に傾斜する川床の地形に沿って据え、横木を固定するため川床に対し直角に縦杭を打つ。堰を高く構築するための斜材は端部では見られないが、傾斜を強めるに従い、横木と縦杭を補強するため多数使用される。

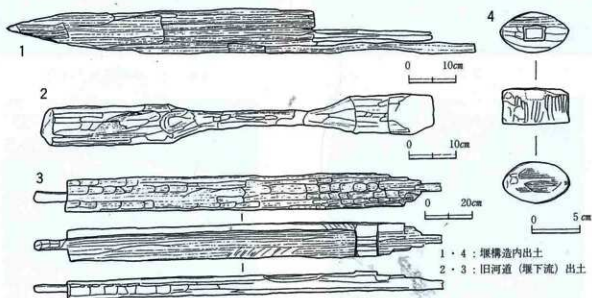
②堰中央部分：川床に据えた横木を挟み込んで固定するため、約50度に傾けた斜材を打



調査地遺構図



1~4: SD-1 5: 塚構造内 8~12: SD-2上層 6・7・13~16: SD-2下層
出土土器実測図 (S=1/4)



1・4: 塚構造内出土
2・3: 旧河道 (堰下流) 出土

出土木製品実測図

ち、斜材を固定する縦杭と横木が設置される。斜材を50度の傾斜にしたのは、堰基底部の構築時に流水の抵抗を軽減しようとしからであろう。堰は、水位の上昇を図るため、横木—縦材—斜材の設置を2～4回繰り返し、高度を保つが、堰端部基礎の横木は中央部にのびて、ここの上部横木となる。このため、端部と中央部は同時に構築されたことが窺える。

上述した構築方法は、模式的なものであり部分的に多様な形状を示しているが、大幅に補修を受けた跡はなく、構造上の差異は構築順序や手法に関するものと思われる。

SD-2は北東から南西に延びており、検出幅14m以上、深さ約2mを測る。堆積層序は一定でないが、上層は白灰色系砂質土が主流であり、層厚0.6mを測る。下層は茶褐色系砂質土層や粗砂を含む灰色系砂質土層があり、層厚0.6mを測る。河床は青灰色系粘質土である。堰遺構は部材の一部を下層に差し込んでいるため、河床に堆積した砂質土を掘

り上げて構築したことが窺える。

堰遺構やSD-2の出土遺物には、土師器や木製品がある(図3)。堰遺構・SD-2下層の遺物は5世紀末から6世紀中頃のものであり、SD-2上層は7～8世紀初頭のものである。SD-2は堰廃絶後も流路として機能していたと考えられる。

SD-1は、トレンチの東から西に延びており、幅約8m、深さ約1.2mを測る。

出土遺物には、流木や須恵器・土師器があり、所属時期が8世紀後半に収まることから、旧河道は奈良時代後半には川幅を縮小し、方向を変更させたことを窺わせる。

確認した堰遺構は、町内では最もまとまったものであり、残存状況も良好であった。堰は田地に給水する役割を担ったと考えられ、今後、給水施設や耕作地の分布を検証する必要がある。従来の河川堆積のみの緊急調査では、河道基底部まで掘り下げることが少ないため、今後入念な調査が求められよう。

(藤岡)



SD-1



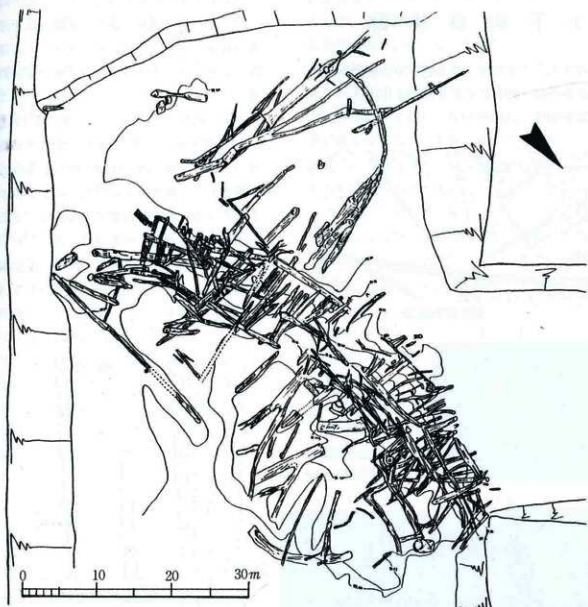
SD-2 木製品出土状況



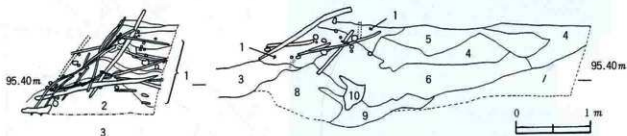
堰遺構中心部



堰遺構



堰遺構平面図



- 1 : 白灰色系細砂質土 (SD-2 上層) 2 : 茶褐色粘質土 3 : 青灰色系粘質土 (SD-2 下層)
 4 : 茶褐色色素細砂質土層 5 : 白灰色系細砂砂質土 (礫混入) 6 : 白灰色系粗砂質土
 7 : 灰色細砂質土 (礫混入) 8 : 暗灰色系粗砂質土 9 : 暗灰色系粘質土層 (SD-2 下層)
 10 : 流木

堰遺構断面図

⑨ 下 鈎 東 遺 跡

調査地 栗東町大字上鈎字中辻越22-1

調査期間 1994年6月3日～6月13日

調査面積 180㎡



調査地位置図



- ▲包含層出土須恵器
- ◀包含層須恵器出土状況

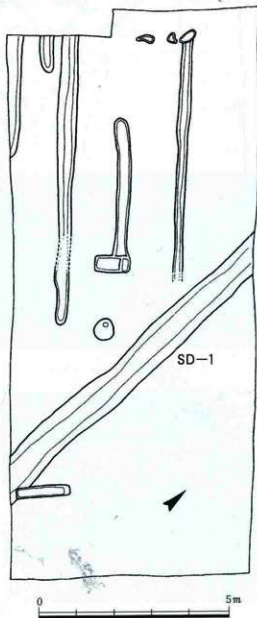


作業風景 (上 南東半分、下 北西半分)

下鈎東遺跡は、弥生時代後期から室町時代にかけての複合遺跡である。東隣には手原遺跡が存在し、異方位地割や企画性のある建物群の状況から、古代の寺院や官衙の可能性が考えられている。

今回の調査では、磁北方向の溝1条(SD-1)、条里方向の小溝5条等が検出された。SD-1は、幅75cm、検出面からの深さ25cmの溝である。奈良～平安時代の須恵器片が出土している。小溝群は幅30～50cmで、土師器片が出土しており、中世以降と考えられる。

今回検出された磁北方向の溝は、手原遺跡の周辺部における古代の遺構の広がりを考え得る資料である。(雨森)



調査地遺構図

⑩ 上 鈎 遺 跡

調査地 栗東町大字上鈎140-1

調査期間 1994年6月15日～7月13日

調査面積 650㎡

上鈎遺跡は、弥生時代から江戸時代に到る複合遺跡で、特に鎌倉時代から室町時代を中心としている。過去の周辺の調査では、鎌倉時代を中心としたの掘立柱建物や室町時代の居館に伴う堀と思われる大規模な溝が検出されている。今回の調査は、日清食品工場のグラウンドにおいて、9カ所にトレンチを設定して行い、古墳時代の旧河道や平安から鎌倉時代の掘立柱建物や溝を検出した。

古墳時代の旧河道は、T-1、T-3～5からそれぞれ同質の粘質土層を確認したことから、その方向は北西から南東にかけて延びていたと考えられる。ここからは、須恵器や土師器が出土しており、その土器の型式から見た年代から、旧河道は6世紀前半～中頃に廃絶したと推定される。

T-5を除く各トレンチからは、旧河道を挟む茶褐色系の地山（遺構面）が認められ、西岸からは溝や柱穴を多数検出した。溝は、N-70°-WとN-30°-Wの大別して二つの

方位軸をもつ。両方向の溝の時期は特定したいが、重複関係からN-30°-Wが後出する時期である。柱穴は、重複関係により概ね溝の時期に対して後出するが、全体的に、古代の須恵器片や平安時代から鎌倉時代の黒色土器が出土しており、時期幅が大きく存廃期間は限定できない。中世の柱穴は重複関係により2～3期にまたがっているが、建物の規模等の詳細は不明である。

T-8・9からは、他のトレンチには見られない埋土を持つ柱穴を検出した。柱穴の時期は詳らかでないが、T-6・7の地山から6cm下った礫の多い地山に位置しており、旧河道にかなり近い立地にあると思われる。柱穴の埋土や立地は、周辺の調査で検出された縄文時代頃の遺構に類似している。成立時期等慎重に検討していきたい。

以上概略を述べてきた。今回の調査はトレンチ範囲の立地的な制約のため、建物規模等の資料は得られなかったが、旧河道からの豊富な土器や、広範囲に広がる柱穴の存在から、古代から中世にかけて集落が展開したことが確認できた。集落の時代的な役割や性格を含め、今後の調査に期待したい。（藤岡）



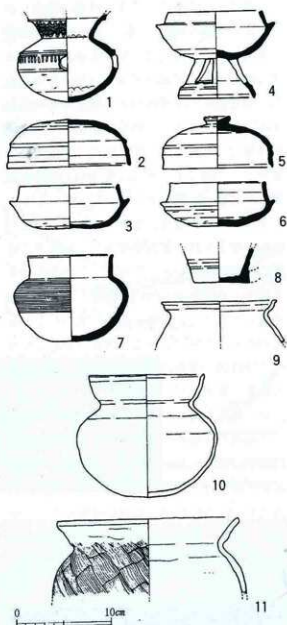
調査地位置図



T-6、SE-1 付近

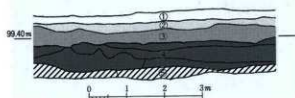


T-4 旧河道付近

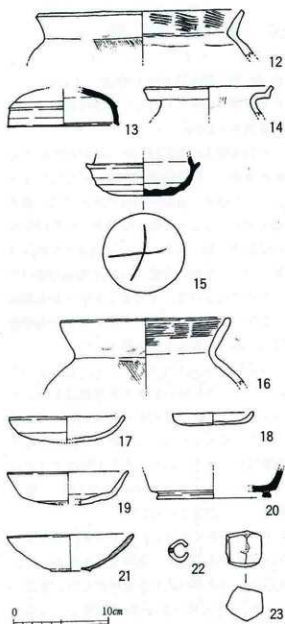


- 1～3：茶褐色系粘質土層出土（上層）
 4～6：暗茶褐色系粘質土層出土（上層）
 7～10：黒灰色系粘質土層出土（中層）
 11：黒灰色系粘質土層、礫混入（下層）

T-5 出土遺物実測図



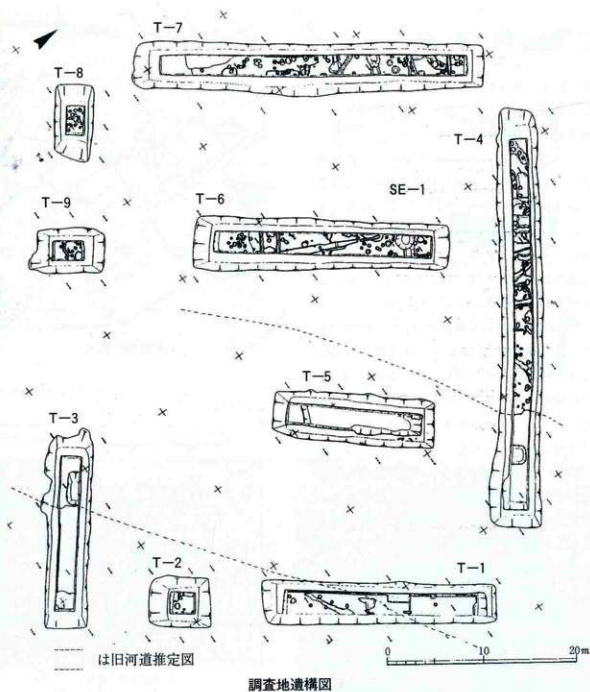
T-5 断面図



- 12～14：T-4 15・18：T-4、SD-2
 16・17・19・20：T-4、ビット
 21：T-4、SK-2
 22：T-6、SE-2（金銅張り耳環）
 23：T-4、SD-5（石製品）

T-4・6 出土遺物実測図

- ①灰褐色系粘質土層（耕土）
 ②茶褐色系粘質土層（旧河道上層-2層）
 ③暗茶褐色系粘質土層（旧河道上層-3層）
 ④黒褐色粘質土層（旧河道中層-6層）
 ⑤黒褐色粘質土、礫混入層（旧河道下層）



- | | |
|---------------------|--------------------|
| ① 灰褐色系粘質土層 (耕土) | ② 黄褐色系粘質土層 (包含層) |
| ③ 暗茶褐色系粘質土層 (旧河道上層) | ④ 黒褐色系粘質土層 (旧河道下層) |

T-4 旧河道付近断面図

⑪ 上 鈎 遺 跡

調 査 地 栗東町大字上鈎寺内275-1 他

調査期間 1994年11月21日～12月16日

調査面積 180㎡

上鈎遺跡は栗山川右岸に位置する、弥生時代から中世の複合遺跡である。遺跡内の大字上鈎寺内に所在する永正寺は、長享元年(1487)に將軍足利義尚が陣を置いた「真宝館」とする説がある。江戸時代後期の「寺内村由来図」によれば、永正寺を中心に鈎の陣所が描かれている。

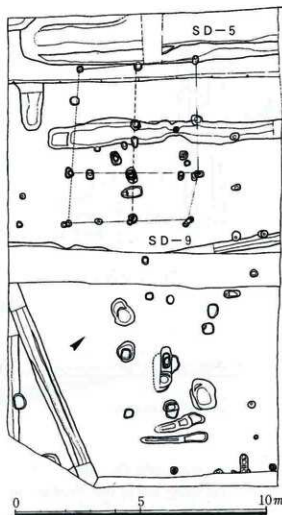
今回調査を行った地点では、この絵図に描かれた「鈎の陣」の内部で、永正寺から約50m南の地点である。検出された遺構には、掘立柱建物・溝・土塋・暗渠がある。掘立柱建物(SB-1)は、3間×2間で、柱穴からは土師器・黒色土器小片が出土している。溝(SD-5)は、幅約200cm、検出面からの深さは約100cmで、現地割に沿った溝である。断面形は逆台形である。遺物は、西側の溝が途切れた部分から投棄された状況で、黒色土器・土師器・青磁・木製品がまとめて出土した。また溝底からは、木および竹で組んだ「扉」が良好な状態で出土した。これは1辺90cmの方形で、約30本の半載した竹を並べ四辺を角材で固定している。2辺と中央には半載した竹で横桟をもうけている。溝内からは、ほかに箸・曲物・下駄などの木製品が出土している。

出土した遺物には、13世紀前半のものと後半のものがあり、前半には掘立柱建物とそれを区画する溝(SD-9)、後半に溝(SD-5)が掘削されたものと考えられる。

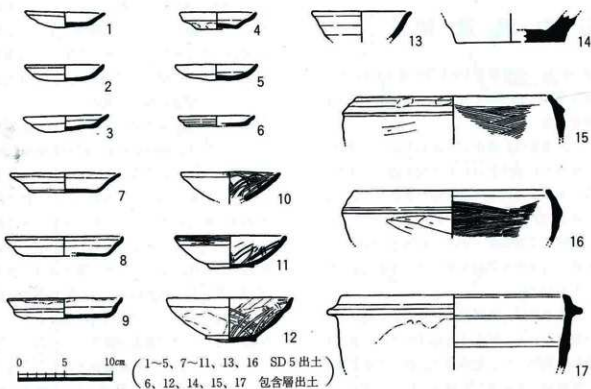
「鈎の陣」は15世紀後半に置かれた陣であり、今回の調査区からはこれに関連する遺構は認められなかった。(雨森)



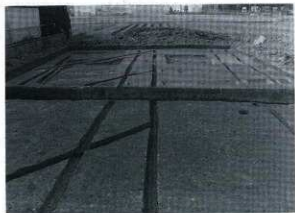
調査地位置図



調査地遺構図



遺物実測図



第1遺構面全景



第2遺構面全景



SD 5 遺物出土状況

⑫ 中 沢 遺 跡

調査地 栗東町大字中沢字大將軍254-1、3
調査期間 1995年1月9日～1995年3月20日
調査面積 700㎡

中沢遺跡は、葉山川中流域左岸に位置する弥生時代から中世にいたる複合遺跡であり、特に弥生から古墳時代後期を中心としている。

過去の調査では、弥生時代後期から古墳時代に属する墳墓群・河道・集落跡が検出され、河道からは建築部材や農具等の木製品が大量に出土している。

本調査地は、墳墓群の中心から北西約50mの地点にあり、弥生時代の溝や中世の掘立柱建物を検出した。遺構面は、黄灰色系粘質土に粗砂質土を含有した層をベースとする1次遺構面(Ⅱ～Ⅵ期)と、1次遺構面から0.2～0.3m深い地層に広がる黄灰色系粘質土をベースとする2次遺構面(Ⅰ期)を確認した。諸遺構は土層堆積状況や遺構の重複関係からⅥ期に分けられる。以下時期毎に概述する。
Ⅰ期：2次遺構面に河道や溝・SK-1が存在する。いずれも時期を特定する遺物に恵まれなかったが、Ⅰの土層堆積や検出状況は北西40mの地点で実施された調査地の2次遺構面と類似しており、これらを勘案すると弥生前期の所屬と考えられる。

Ⅱ期：SD-7・SD-9は、幅約4m、深

さ約0.8mを測る。各溝の切岸はクランクが付けられており、人工的な構築であることが伺える。基底部は、レベルの高低差から南方向から北方向に傾斜している。弥生Ⅵ様式を中心とした遺物の出土を見た。

Ⅲ期：SD-9廃絶後、SD-6が形成される。弥生Ⅴ様式を中心とする遺物を検出した。
Ⅳ期：SD-7、SD-9は、溝幅・深さ共に縮小させながら、SD-2・3に流路方向を継承させている。SD-7・SD-9は堆積土に砂層が含まれるのに対し、Ⅳ期の溝は粘質土が主体になっており、流量はかなり減少していたと思われる。いずれの遺構も弥生Ⅴ様式を中心とした遺物の出土を見た。

Ⅴ期：SD-8は事実上廃絶して小溝SD-5となる。トレンチ東端で検出されたSX-1は、周溝幅約1.5m、深さ0.2mを測る。時期を特定する遺物には恵まれなかったが、弥生時代後期の溝に後出することから、古墳時代頃の所産と考えられる。

Ⅵ期：中世の掘立柱建物や井戸等が検出された。各遺構からは、11世紀中頃から12世紀中頃の黒色土器や土師皿等を確認した。

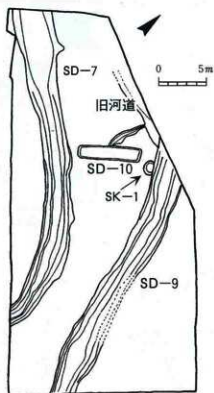
今回検出した溝は、弥生時代後期から古墳時代初頭の約300年にわたって、規模を縮小しながらも下流に向かって維持され続けていた。弥生後期の集落を主体とする下流の草津市淡川に向けて開発が進行していく過程が伺え、今後の調査への期待は大きい。(藤岡)



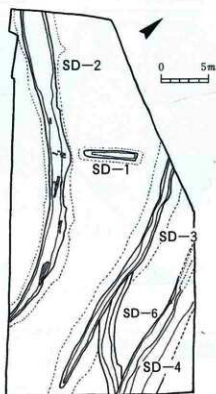
調査地位置図



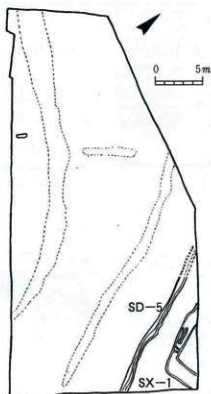
中沢遺跡Ⅲ期全景



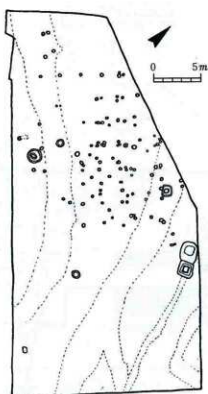
遺構配置図Ⅰ～Ⅱ期



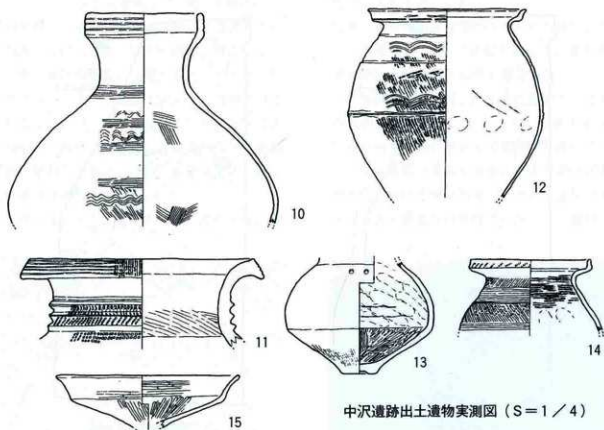
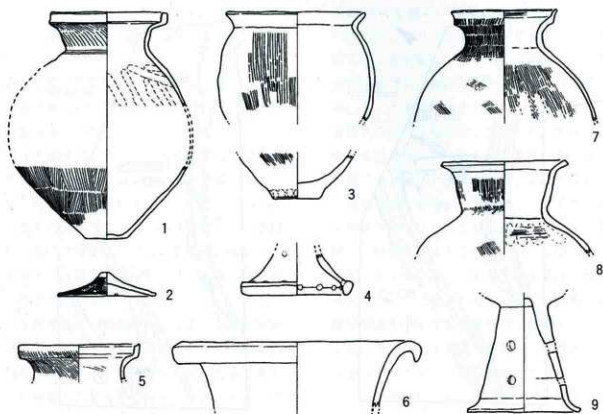
遺構配置図Ⅲ～Ⅳ期



遺構配置図Ⅴ期



遺構配置図Ⅵ期



中沢遺跡出土遺物実測図 (S=1/4)

1~3: SD-10, 4・5: SD-9, 6: SD-7
 7: SD-1, 8~9: SD-8, 10~11: SD-6
 12・13・15: SD-3, 14: SD-2

⑬ 小 柿 遺 跡

調 査 地 栗東町大字小柿310-5

調査期間 1994年7月15日～8月3日

調査面積 211㎡



調査区位置図

小柿遺跡は縄文時代後期～鎌倉時代にいたる遺跡・遺物を遺す複合遺跡として周知され、弥生時代後期後半の良好な遺物（木製品・弥生土器）や、埴輪を有する古墳時代後期の古墳群等が出土確認されている。

今回の調査では、耕土、床土下の黄灰色粘土層上（標高：96.75メートル）で蛇行して



調査区全景

東流する流路を一部検出した。流路は幅7メートル以上を測り、下記の大略3層の埋土からなる。

*上層：汚灰色砂質土

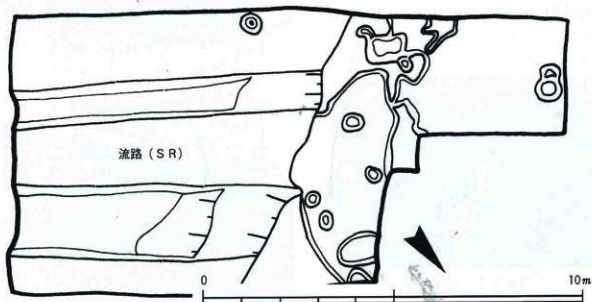
*中層：黒灰色粘土層

*下層：黄灰色砂層

上層からは白鳳・奈良時代（7世紀後半～8世紀代）、中層からは古墳時代（4世紀～6世紀代）、下層からは弥生時代後半（3世紀前半）の土器類が各々出土している。

その他の遺構は性格等、判然としなが、中に柱根を遺すピットも含まれている。

（大崎）

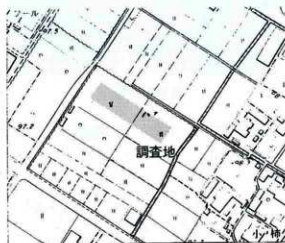


⑭ 小 柿 遺 跡

調 査 地 栗東町大字小柿字倉田306-1

調査期間 1994年1月10日～2月28日

調査面積 310㎡



調査区位置図

小柿遺跡は縄文時代晩期～中世にいたる様々な時代の遺構・遺物を遺す複合遺跡として周知されている。

今回の調査では耕土・床下直下の黄灰色層上（標高：97.10メートル）で弥生時代後期後葉の竪穴住居3棟が確認されている。

竪穴住居（SH）は一辺約7メートルの方形を呈するもので、いずれも床中央には炉、東壁中央には屋内土壇を有し、4主柱構造をとる。



SH02 調査風景

その他の遺構には推定方形周溝遺構や土壇が見られるほか、調査区東端には掘立柱建物の存在もうかがわれる。

(大崎)

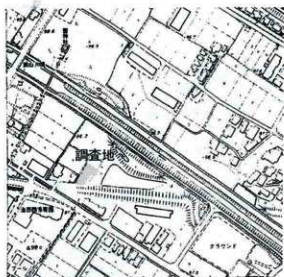


⑮ 小 柿 遺 跡

調 査 地 栗東町大字中沢108

調査期間 1995年2月20日～3月8日

調査面積 276㎡



調査地位置図



井戸 (近世以降)



旧河道 (古墳時代～平安時代)

今回の調査区は、葉山川中流域の左岸に位置する。調査区の南側に隣接した地点には、明治時代に付設された関西鉄道の線路跡がのこっている。

本調査区で検出された遺構は、古墳時代から平安時代前期の旧河道、平安時代後期の掘立柱建物3棟・区画溝、近世以降の井戸、時期不明の小溝である。

旧河道は、東から西に向かって流れていたと考えられる。その本流は南西肩直下であり、本流部の深さは検出面下約140cmである。下層から古墳時代の土師器高杯片が出土し、上層からは土師器杯身片が出土した。

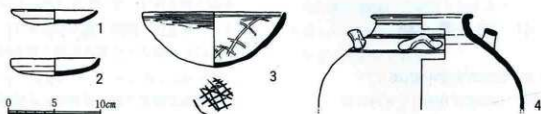
平安時代後期の遺構には、掘立柱建物(SB-1～3)、区画溝(SD-1・2)がある。SB-1は3×2間で、柱穴は1辺約40cmの隅丸方形である。P-9から灰釉四耳壺片が出土した。またSB-1に近接するピット(P-13)からは、石製硯が出土した。SB-2は3×2間と考えられる。柱穴は円形で直径約40cmである。SB-3は柱穴2箇所のみが検出されたもので、調査地外へ延びるものと考えられる。

SD-1はSB-1の北東側に沿っている溝で、幅約90cm、深さ約30cmを計る。埋土は2層に分かれている。上層の暗茶褐色土層から、多量の黒色土器碗・土師器皿や瓦器皿などが出土した。SD-2はSB-2の南西に沿う溝で、幅約180cm、深さ約5cmを計る。

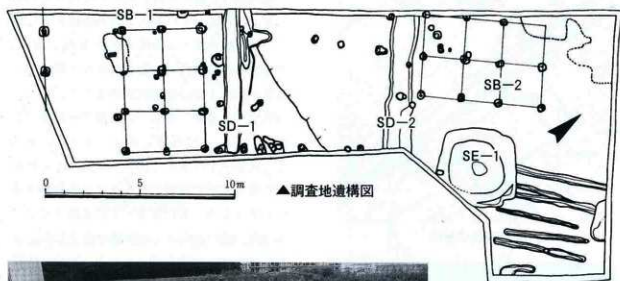
小溝からは時期を特定できる遺物が出土していないが、建物群に伴う耕作地の可能性が考えられる。

SE-1は近世以降のものと考えられる素掘りの井戸である。掘り方は隅丸方形を呈し、1辺約400cmを計る。検出面からの深さは約160cmである。

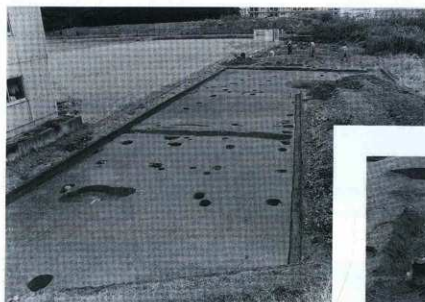
今回の調査では、河道埋没後に形成された平安時代後期(12世紀)の集落が検出された。当該期の集落の広がりを知る上で貴重な資料である。(雨森)



出土遺物 (1~3 SD-1 出土
4 SB-1(P9) 出土)



▲調査地遺構図



◀調査地全景



P-8 壺出土状況



P-13 視出土状況



SD-1 土器出土状況

⑬ 手 原 遺 跡

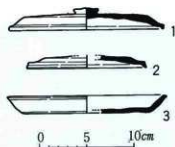
調 査 地 栗東町手原 6 丁目 226 他

調査期間 1994 年 9 月 12 日～9 月 13 日

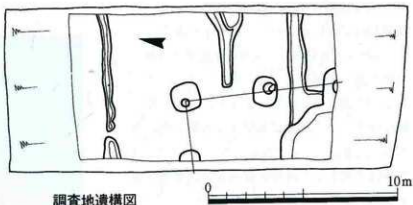
調査面積 40m²



調査地位置図



包含層出土遺物



調査地遺構図



作業風景 (南よりみる)



掘立柱建物 (西よりみる)

手原遺跡は、JR草津線手原駅周辺に所在し、異方位地割の存在から、その性格が寺院や官衙として想定されてきた。今回の調査地は手原遺跡の北端にあたる。

調査で検出された遺構には、掘立柱建物・溝がある。掘立柱建物は2間以上×1間以上で調査区外に広がる。柱穴は1辺80cmの隅丸方形である。

包含層からは、奈良～平安時代と考えられる須恵器・土師器が出土している。

手原遺跡でも、とくに奈良～平安時代には、性格の異なる建物群をブロックごとに配置している傾向がみられ、官衙的な性格が窺える。今回の調査地の所在する北端部においては、これまでの調査で3～4×2間の隅柱建物群の存在が明らかになっている。今回検出された遺構も同様の建物となる可能性があり、手原遺跡北端部の建物群の状況と、その範囲の一部が明らかになったといえよう。(雨森)

⑰ 坊袋遺跡

調査地 栗東町大字目川字大鳥井
調査期間 1994年8月25日～10月20日
調査面積 1000㎡



調査区位地図

坊袋遺跡は金勝川と葉山川に挟まれた狭い沖積地に位置する。周辺は湧水点が高い金勝川の後背湿地の性格が濃く、しっかりとした遺構面は認められない。これまでの調査により、弥生時代中期末、および後期後半の遺構・遺物を遺す遺跡として知られている。

今回の調査では耕土、床土下の灰色砂質土層をはぎとった段階で露呈する汚黄灰色砂質土層上（標高：101.50メートル）において弥生時代中期末から後期初頭の方形周溝墓3基や流路、溝等の遺構が確認されている。

方形周溝墓（SX）

SX01：一辺推定9メートルの方形を呈する。周囲には幅員1～3メートルの溝（現存深さ0.4メートル）を不正円形状にめぐらせる。

SX02：一辺7.5～8.5メートルの方形を呈する。周囲には幅員1～2メートル（現存深さ0.5メートル）の溝をめぐらせるが、西端隅部には1メートル幅の陸橋部を持つ。

SX03：一部のみの確認にとどまるが、推定一辺14メートルの方形を呈すると思われる。東端隅部に1.5メートル幅の陸橋部を有する。



SX03



SH02



SX01、SR01、02

溝幅は3.5メートルを測る。

これらの遺構からは完形の土器の出土はないが、高坏、長頸壺等が出土している。

流路（SR）

SR01：蛇行して西流する流路の一部。

現存深さ0.6メートル。

SR02：西流する流路。幅員1メートル、現存深さ0.4メートル。高坏・器台・壺・甕

等、本調査においてもっとも良好な資料が出土している。

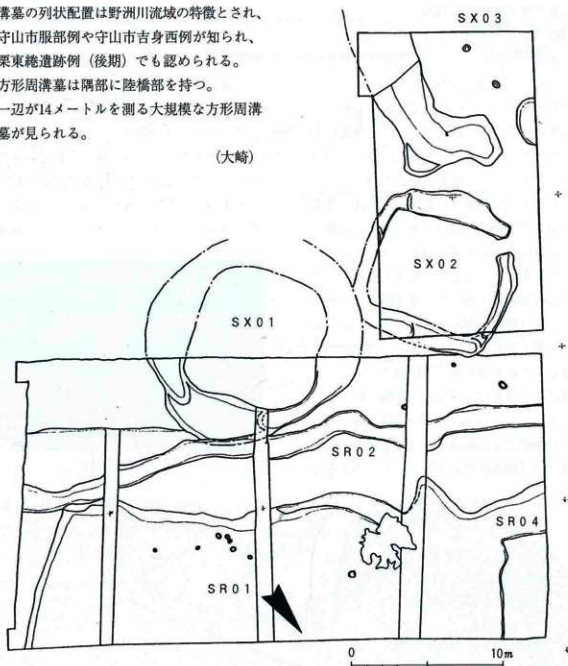
SR04: SR01の西端から分流する流路幅員3メートル、現存深さ0.4メートル。

弥生時代の方形周溝墓は、栗東においては霊仙寺遺跡、下鉤遺跡、中沢遺跡、縄遺跡で確認されており、今回で5例目となる。

以下に本調査例の特徴を列記する。

- *列状配置が現状では認められない。方形周溝墓の列状配置は野洲川流域の特徴とされ、守山市服部例や守山市吉身西例が知られ、栗東縄遺跡例（後期）でも認められる。
- *方形周溝墓は隅部に陸橋部を持つ。
- *一辺が14メートルを測る大規模な方形周溝墓が見られる。

(大崎)



⑪ 安養寺遺跡

調査地 栗東町大字安養寺735, 737

調査期間 1993年4月25日～6月17日

調査面積 600㎡

安養寺遺跡は、野洲川と草津川が形成する扇状地に面する、標高234mの安養寺山北麓の低丘陵上に位置する。

当地の歴史的環境を概観すると、古墳時代は新開古墳に代表される安養寺古墳群が丘陵上に展開し、奈良時代には、安養寺の創建が知られるが、確実な同時代史料は存在しない。

室町時代には、1487年に足利義尚が安養寺に布陣した際、「藤涼軒日録」に「安養寺者数寺也 五六房有之」との記述があり、在地の有力寺院としての規模と格式を持っていたことが窺える。安養寺の道場（房）は、手原や下鉤にまで散在していたが、近世には戦火のため寺域をかなり小ささせたようである。

今回の調査は、安養寺の塔中が伝承された小字山寺屋敷で実施した。基本層序は2層見られ上層は耕土で層厚20cm、下層は茶褐色粘質土で粗い砂粒を混入する脆い土質であり、遺構はこの面を切り込んで展開している。

確認した遺構は、古代から近世にまたがる。SH-1は3.5×5mの規模を持ち、N-8°-Wの方位軸をとる。西側にカマドを据えるが、貯蔵穴等は確認出来できなかった。7世紀末

から8世紀初頭の須恵器を確認した。

SB-1, 2は時期を特定する遺物に恵まれなかった。方位軸は磁北に近く、周囲の土壌（SK-4）からは、奈良時代頃の遺物が認められるため、SH-1に接近した時期の所産と考えられる。

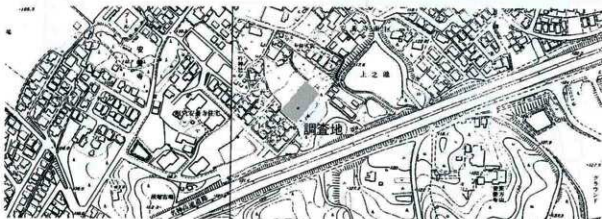
中世の遺構には、SD-1・2, SE-1・2があり、信楽焼の壺や黒色土器・箸等、13～14世紀中頃の遺物が見られた。遺構上直接房の存在を直接示すものは見られなかったが、SD-1からは五輪塔の空・風輪部分が、石組を持つ井戸からは、瓦質の鉢や瓦を検出し、寺院施設との関わりを窺わせる。

近世以降では、楡皮を敷いた暗渠を検出し、丘陵の低部の田地開発の一端を確認した。

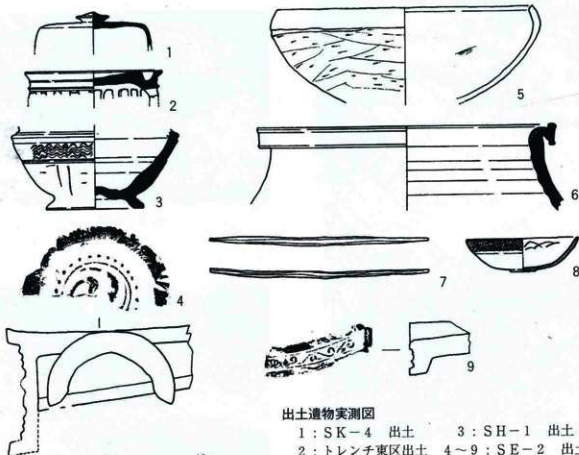
今回の調査では、寺院等の宗教施設を特定するには到らなかったが、硯の出土を見る等、一般集落には無い特殊性が窺えた。今後の調査に期待が持たれる。（藤岡）



調査地西区

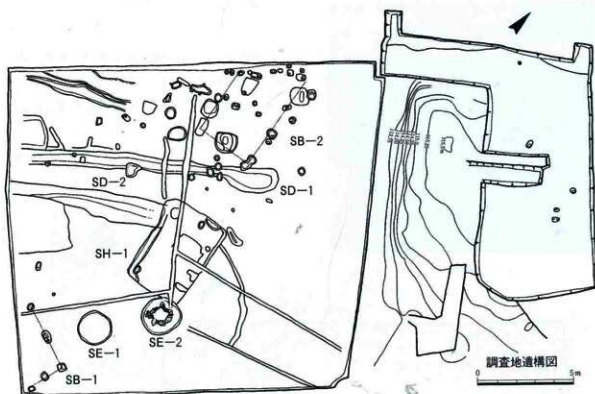


調査地位置図



出土遺物実測図

1: SK-4 出土 3: SH-1 出土
2: トレンチ東区出土 4~9: SE-2 出土



調査地遺構図

⑨ 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字辻字坂西414

調査期間 1994年4月20日～5月30日

調査面積 360㎡



調査地位地図

辻遺跡は縄文時代以降、多様な遺構遺物を遺す複合遺跡として知られている。

今回の調査では耕土直下の黄灰色層上（標高106.50メートル）から、円筒埴輪を有する11～13メートルの後期方墳、幅2.5メートル



埋壙



井戸

方墳



調査区全景



方墳

の流路等の6～7世紀の遺構や、黒色土器白磁を遺す中世の井戸等が検出されたほか、下層より縄文時代後期の土壙や埋め壳、配石遺構等が検出されている。

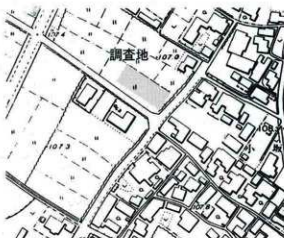
(大崎)

②0 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字辻小坂西412

調査期間 1994年6月15日～7月15日

調査面積 260㎡



調査区位置図

辻遺跡は縄文時代以降、様々な時代の遺構遺物を遺す複合遺跡として周知されている。

今回の調査では耕土直下の黄灰色層上（標高106.80メートル）で、竪穴住居8棟、掘立柱建物3棟等が検出されている。

竪穴住居（SH）は一部に切り合い関係を持つが、いずれも7世紀中葉前後に位置づけられる。掘立柱建物は7世紀後半～8世紀代のものである。

辻遺跡では掘立柱建物への転換は7世紀第1四半期～中葉にあり、その意味ではこれらの竪穴住居はその最終段階のものといえる。

（大崎）



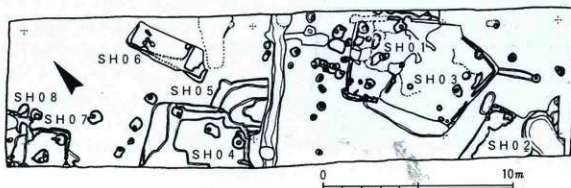
調査区、東半部



SH01カマド



SH03 須恵器出土状況



② 辻・高野遺跡

調査地 栗東町大字高野地先

調査期間 1994年5月14日～1995年3月31日

調査面積 約5,000㎡

1994年に行なわれた1993年度区画整理事業に伴う第1次調査では、現在の水田面から約30cm下げた地点で古墳時代から江戸時代以降の河川、溝などが見つかり、現在の中ノ井川が成立する以前の様子を知ることができた。さらにこの面から70～80cm下げた地点では、縄文時代の生活面が存在し、建物もしくは柵に伴うピット、壁溝らしきものが確認された。しかし縄文時代の詳細な時期を特定するにはいたらなかった。

前回の調査(T1～T4)で確認された遺構、遺物の時期は、I期縄文時代、II期古墳時代(4～6世紀)、III期白鳳時代(7世紀)、IV期奈良時代(8世紀)、V期平安～鎌倉時代(9～13世紀)、VI期室町～安土桃山時代(15～16世紀)、VII期江戸時代以降(17～20世紀前半)に分けられ、今回もこの時期区分にそって各トレンチごとに概略する。

(T5) トレンチ5では、採掘土坑を中心に溝、ピットなどが確認されている。採掘土坑は既に周知のとおり、瓦の原料となる粘土を取った跡(VII期)とされている。SD-5



調査地位置図

の南側一帯に広がり、大小含めて30基以上確認された。SD-5付近は連続して掘られており、大きいもので長径7～8m、深さ50～70cmに達する。SD-5はT4から続く溝(VI期)で、東から西南方向へのびている。SD-2は、T1から西南方向へのびる溝で、トレンチの端付近で東へ屈曲する。時期はIV期に相当する。

(T6) 調査区北辺にそってのびる溝(SD-601)で、T4のSD-1(IV期)に続く溝である。ここでもT5の続きと思われる溝(SD-605)が、南東方向で一部確認されている。

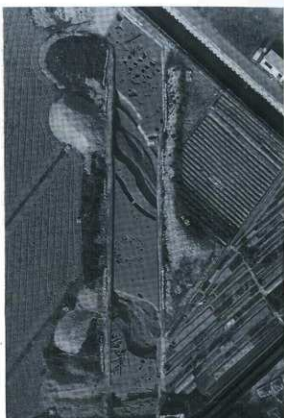
(T7) T1から中ノ井川を挟んで南東へ向かってのびるトレンチで、II期からV期にかけての河道および溝と、II期前半の堅穴住居2棟と、IV期後半と思われる掘立柱建物が2棟確認されている。調査区中央付近で確認された1号住居は、既に検出時点で床面近くまで削平を受けており、炉、壁溝の一部が露呈していた。拡張もしくは建て替えの跡がみられ、拡張前の規模は約4.8×5m、拡張後は約6×6mである。南辺中央付近に土坑をもち、炉は中央付近に存在する。拡張前の壁溝は南辺を除いて明確であるが、拡張後の壁溝は幅広い部分がみられるなど、通常みられる壁溝とは少し異なっている。一方、IV期の掘立柱建物の内一棟(SB-1)は、3間×3間の総柱の建物で倉庫と考えられる。もう一棟(SB-2)は、一部しか確認できなかったため詳細は明らかではない。これらの建物は、溝(SD-701, 703)によって区切られていた可能性がある。これらの溝は、II期の河道が埋まった後、新に水路のような機能として再掘削したことが考えられる。

(T8) トレンチ8では、耕作痕、落ち込み、ピットなどがわずかに存在するが、時期を特定するような土器は出土していない。埋土の状況から判断すると、ほとんどがⅦ期のものと予想される。

(T9) トレンチ9は、T5・SD-5から続く溝(SD-505)や、Ⅶ期と考えられる水溜め遺構、採掘土坑、ピットなどが存在する。水溜め遺構は、底に桶を置いた構造をとる。

(T10) トレンチ10では、Ⅶ期以前の遺構は確認されなかった。確認された遺構は全てⅦ期のものと考えられ、耕作痕、採掘土坑、ピットがある。

(T11) トレンチ11では、Ⅱ～Ⅳ期と考えられる幅9m以上、最深で約1.3mの河道や溝(Ⅳ期)2条が確認されている。河道はT4から続くものと同一と思われる。注目すべき点は、Ⅴ期と考えられる遺物に多量の燃えさしや、桃の種、刀形、ヤス形などの木製品の他、板の両端に三角形の切り込みを左右に2ヶ所ずつ入れた全国的にも類例の少ない仮称串状木製品が出土した。これらの遺物から水辺の祭祀(わざわいや病氣などを祓う祭)



T7 調査区全景



T5 採掘土坑群とSD-5 (東から)

が行なわれていたことが推測される。

(T12) T6に続くトレンチで、T11同様に、T4に続く河川が確認されている。遺物も祭祀行為を伺わせる木製品や桃の種が出土している。

〈下層遺構〉

下層遺構の確認として、T5、T8～10のトレンチに合計5ヶ所の断ち割りを行なった。T8ではbトレンチで、南北方向にのびる液状化跡を確認した。同様なものが、T9、10においても確認され、全部で6ヶ所確認されている。亀裂の幅は、最大で約20cmで、地表下約60cmまで砂が吹き上げている部分がみられた。残念ながら上層の遺構面まで液状化跡が達していないため、縄文時代以降の地震跡であるという程度しか判断できなかった。ただし、高野遺跡から約2km西にいった野尻遺跡で、琵琶湖西岸部地震(1662年)による断層や同時期の可能性をもつ液状化跡が確認されているので、今回確認されたものも、同時期におこった地震跡である可能性をわずかに残している。

縄文時代の遺構は、T10の北西隅で確認された。検出時点で、土器の小片や、木の実を含んだ場所が存在し、この部分を掘り下げる

と、土坑が連続して存在する部分に、木の実が捨てられた状況で確認された。木の実全てドングリ類と考えられ、大半がイチイガシを含むコナラ属かシイ類の一種である。また石器には、石鏃、石錘、石皿などがある。土器は小片で残りはよくないが、竹管による押し引きの刻みをもつ条痕文系土器や、C字形の爪形文をもつ条痕文系土器(北白川下層A式)などが出土している。いずれも縄文時代前期前半頃のものと思われる。T1およびT5下層で確認された土器の中にも、条痕文系土器がわずかに認められており、T10下層の土器よりやや古い特徴をもつことから、下層に存在する縄文時代遺構の時期が、早期末もしくは前期初頭に遡る可能性がある。

第2次調査における大きな成果は、1次調



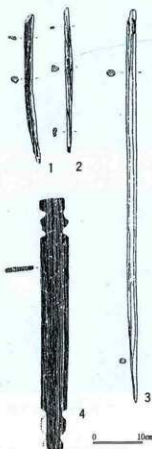
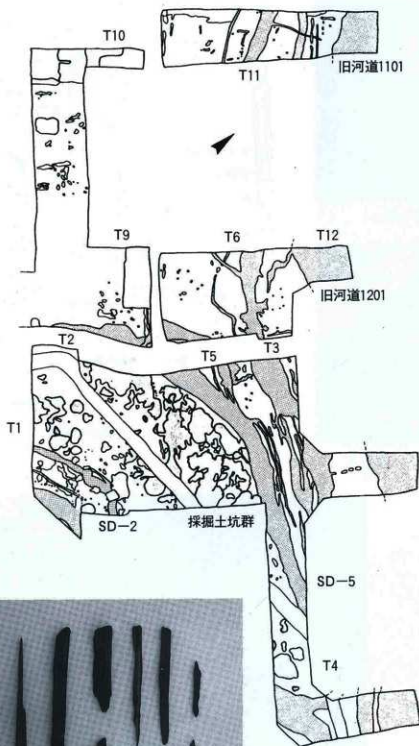
T7SD703遺物出土状況



T11旧河道1101遺物出土状況



T7SD701遺物出土状況



旧河道1101出土木製品



燃えさし (T11旧河道1101出土)



旧河道1101出土木製品

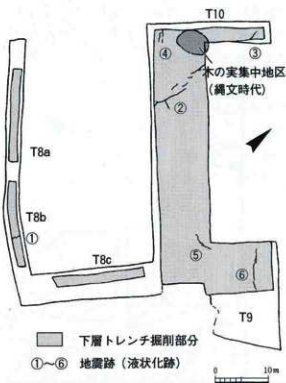
調査地遺構図



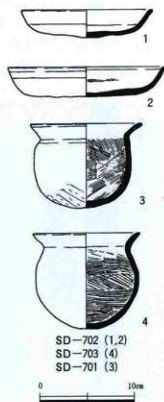
T10下層液状化跡②断面



T8下層液状化跡①周辺作業風景



T8～T10 下層地震跡位置図



T7 出土土器実測図



T6、T9～T12調査区全景

査で時期を明確にすることができなかった縄文時代遺構の時期をある程度しはれたこと。
T11、12で確認された河道において、水辺の祭祀が行なわれていたことが推測され、V期において、この付近に有力氏族が存在したことを裏付けることができた。

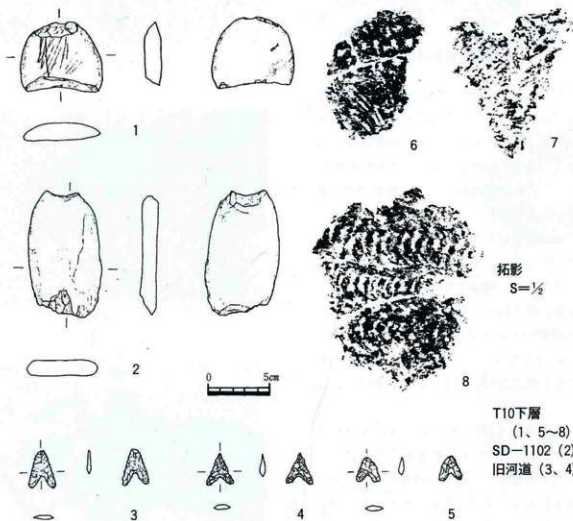
縄文時代の遺物について、伊庭功、中川治美、濱 修氏に御教示いただいたことを記して感謝します。
(近藤)

参考文献

- 1) 泉拓良「第2節遺物Ⅰ」『栗津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会・湖沼県文化財保護協会 1984
- 2) 寒川旭「野尻遺跡の地層について」『栗東町埋蔵文化財発掘調査1992年度年報』(栗東町文化体育振興事業団 1993)



T10下層縄文時代遺構



T10下層
(1、5~8)
SD-1102 (2)
旧河道 (3、4)

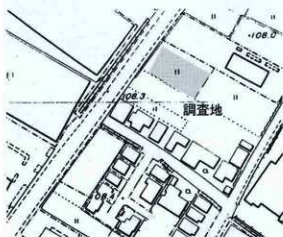
T10下層他石器実測図・縄文土器拓影

② 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野字下別当577-1

調査期間 1994年11月1日～12月27日

調査面積 670㎡



調査区位置図

高野遺跡は縄文時代以降、多様な遺構遺物を遺す複合遺跡として周知されている。とりわけ、竪穴住居を中心とする3世紀後半～4世紀代の遺構、遺物には見るべきものがあり、隣接する辻・岩畑遺跡とともに野洲川左岸集落群を形成している。

今回の調査地点周辺については高野遺跡における中心的な一つの集落の拡がりやすでに知られており、南接する地点において当該期の多数の竪穴住居が確認されている。

本調査でも耕土直下の黄灰色層上（標高107.30～107.60m）において竪穴住居や多数の土壌が検出されている。以下に概略を記述する。

竪穴住居（SH）は一辺5.5mの方形住居で、現存深さは約0.6mを測る。周囲には住居を取り囲むように径10cm程度の小ピットが多数見られる。床面は比較的踏みしまりがあり、4支柱の中央には浅い炉が形成されている。壁沿いには幅20cm前後の壁溝がめぐり、その内側には幅50cm程度の緩やかな高まりが存在する。そして南壁ほぼ中央には方形の屋

内土壌が見られる。

埋め土層は大略下記の3層からなる。

*上層：灰褐色層

*中層：暗褐色層（多量の土器を含む）

*下層：汚黄灰色層

下層は住居肩口の崩落層、中層は一括性の高い遺物を包含する廃棄層である。



SH01



SH01隅部



SH01土器出土状況

中層出土土器には壺、甕、高坏、器台、鉢手あぶり型土器等が含まれており、高野遺跡における当該期の最古資料の一つであり、3世紀後半代の土器を知る上で良好な資料を提供するものとなろう。

土壙（SK）は20基前後あるが、そのうちSK01～05は土壙墓の可能性が高いものである。

SK01、03、05は長径2.0m、短径0.5mの楕円形状を呈する。深さは約30cmを測る。SK02は一辺1.0～1.5mの方形状を呈する。SK04は長辺2.8m、短辺1.0mの隅丸長方形形状を呈し、内部には木棺痕を認める。いずれの遺構からも破片ではあるが、SH出土土器に近い資料が出土しており、相前後する時期に位置づけられよう。

その他の遺構では調査区西端に櫛列状のピットが見られるが、時期等については不明である。またそれに近接して小ピットも多数認められるが、詳細は不明である。

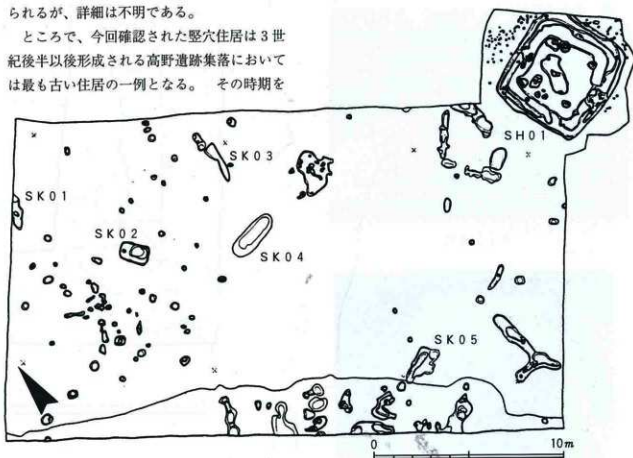
ところで、今回確認された竪穴住居は3世紀後半以後形成される高野遺跡集落においては最も古い住居の一例となる。その時期を



SK05

弥生時代末と呼ぶか、古墳時代初頭とみなすかは評価の分かれるところであるが、畿内編年に照らし合わせれば、庄内併行期を3段階に区分したときの2段階に位置づけられよう。

（大崎）



② 中村遺跡

調査地 栗東町大字御園字谷2053

調査期間 1994年10月24日～10月28日

調査面積 50m



調査区位置図

中村遺跡は金勝川右岸に位置し、中世の遺構、遺物の存在が知られている。中でも鑄造遺構をともしな建物群は湖南の名利、金勝寺周辺の遺跡だけに興味深いものがある。

今回の調査は隣接地調査で確認された中世遺構の延長部を把握することを主目的に実施したが、後世の攪乱のためとらえることができなかった。

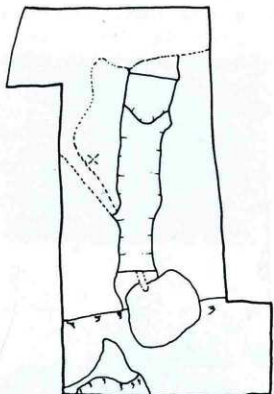
図は、近世以降の溝状遺構と土壌である。一部ほりこみを実施したが、若干の木片をのぞき、遺物の出土はない。(大崎)



検出風景



調査区全景



③ 縄 遺 跡

調査地 栗東町大字縄字中ノ橋858

調査期間 1994年3月28日～4月4日

調査面積 302㎡

縄遺跡は、栗東町縄・北中小路に所在する、弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。とくに、遺跡北端における弥生時代の方形周溝墓群、中山道の西側一帯に広がる中世集落、および北中小路集落の外側にみられる中世末から近世の濠跡などが顕著なものとして知られている。

今回の調査区は遺跡の西端にあたり、大宝神社に近接する。検出された遺構は、櫛列と

考えられる柱穴群である。柱穴の平面形は径約30～50cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは、約10～30cmの浅いものである。柱穴からは古墳時代とみられる須恵器の小片がみつかった。

検出された櫛列には、これに伴う住居や川等の遺構がみつかっておらず、その性格については、今後の周辺地区の調査成果に委ねられる。(雨森)



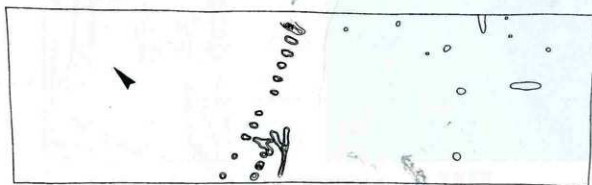
調査地位置図



作業風景



調査地全景



調査地遺構図

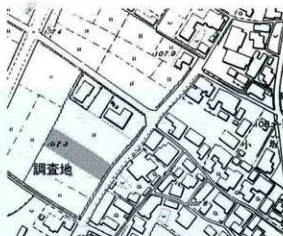
0 5 10m

③ 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字辻字小坂西415-2

調査期間 1994年3月7日～4月27日

調査面積 854㎡



調査位置図

辻遺跡は縄文時代以降、様々な時代の遺構遺物を遺す複合遺跡である。

今回の調査では耕土直下の黄灰色層上（標高106.50m）で多数の不整形形状のほりこみが検出された。いずれも近世以降の土取り痕と推察される。深さは、0.2～0.6mを測る。

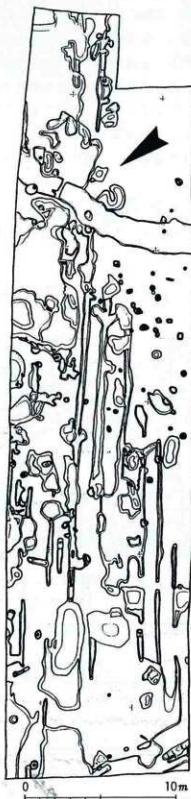
なお、上記遺構のほりこみ工程の中で若干の縄文土器片が出土したため、一部黄灰色層のたち割調査を実施したところ、約0.5m下より多量の土器が出土した。



調査風景

遺構プランは明確ではないが、精製・粗製深鉢がみられ、いずれも縄文時代後期（北白川上層式）に相当する。

（大崎）



国庫補助事業・町事業 埋蔵文化財発掘調査

94年度国庫補助事業調査

	遺 跡	調 査 地	原 因	遺 構	遺 物	頁	担当
24	上砥山古墳群	上砥山字吉田299-1		古墳周溝	須恵器(飛)、瓦(白)	68	佐伯
25	野 尻	縄字不老田415		竪地土坑	陶磁器、瓦(近)	69	猿向
26	高 野	高野字戸別当522-1		井戸・溝(中)	土師器・黒色土器	70	大崎

94年度町事業調査

	遺 跡	調 査 地	原 因	遺 構	遺 物	頁	担当
27	和田古墳群	下戸山字和田	古墳群整備事業	無し	無し	71	大崎 佐伯

構覧では、下記の略号を用いた。

(縄) 縄文時代、(弥) 弥生時代、(古) 古墳時代、(飛) 飛鳥時代、(白) 白鳳時代
(奈) 奈良時代、(平) 平安時代、(鎌) 鎌倉時代、(室) 室町時代、(江) 江戸時代
また、時代が特定できない場合は (中) 中世、(近) 近世などと表すことがある。

② 上砥山古墳群（龍王古墳）

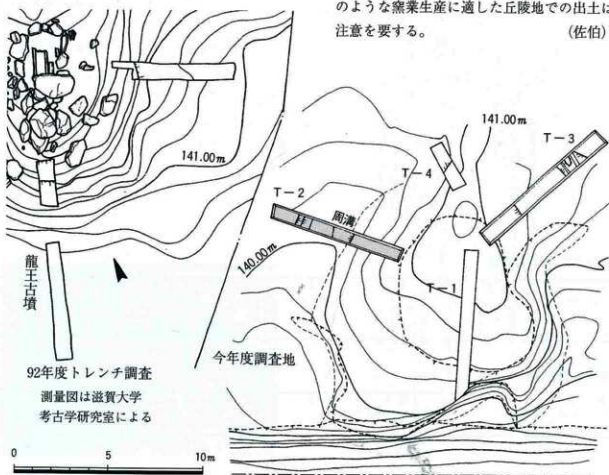
調査地 栗東町大字上砥山字吉田299-1

調査期間 1994年4月18日～4月27日

調査面積 400㎡



調査地位置図



調査地トレンチ及び地形測量図 S=1:200

町指定史跡龍王古墳（7世紀前半）は、径約16mの円墳で、半壊している横穴式石室から家形石棺が露呈している。古墳の南東に接して径約13～14mを測る墳丘状の高まりが存在するためトレンチによる確認調査を実施した。

その結果、高まり自体は古墳とは認められなかったが、トレンチT-2では、幅6m・深さ1.4mの人工的に掘られた溝を確認した。これは龍王古墳の周溝になる可能性のあるものである。92年度の調査により墳丘北側は丘陵の尾根を整形するのみで周溝は確認されなかったため、全周はしないが、墳丘規模の見直しが必要と思われる。溝からは須恵器の小破片が2点出土した。

また、トレンチT-3では凸面縄目叩きの平瓦片が出土した。当調査地周辺では瓦窯跡（樋ノ口窯）の存在が指摘されているが、このような窯業生産に適した丘陵地での出土は注意を要する。

（佐伯）

②⑤ 野 尻 遺 跡

調査地 栗東町大字総字不老田415

調査期間 1994年6月14日～6月19日

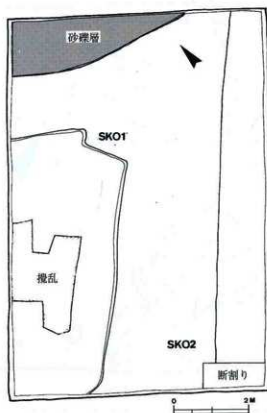
調査面積 70㎡



調査地位置図

今回の調査は、栗東駅前土地区画整理事業後の個人住宅の造成に伴う発掘調査である。位置的には、現駅前交通広場の南側にあたる。総調査対象地は、389㎡である。

掘削にあたっては、工事計画に合わせ住宅建設予定部分に調査トレンチを設定した。



遺構平面図

層序 認められる層序は、次の3層である。
上層から、層厚0.4m程の区画整理時の整地土、層厚0.2m程の旧耕作土層、そして、鉄・マンガンを含む黄灰色系粘質土の地山層である。
遺構 検出した遺構は、現代の整地土層2基である。また、トレンチ北側では、河川堆積の砂礫層が確認できた。

SK01 東西3m以上・南北7m以上・深さ0.15m程を測る土層である。中央部の攪乱部にはベニヤ合板が見られた。

SK02 東西1.3m以上・南北10m以上・深さ0.2m程を測る土層である。埋め土は、炭・焼土ブロックを含んだ地山土層と、灰色土層からなる攪乱整地土層である。遺物的には、棧瓦・近世陶磁器片が出土した。

以上のような状況からは、旧建物の廃絶後このような整地によって、その後生産地として利用されたことが理解される。

今後の調査によって、遺跡の全体像がなお一層判明することに期待したい。(猿向)



SK02 土層断面状況(北東から)



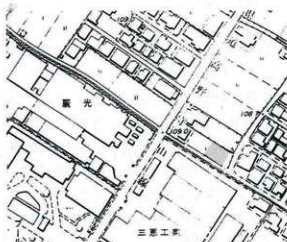
SK02 出土遺物

②6 高野遺跡

調査地 栗東町高野522-1

調査期間 1995年3月6日～3月24日

調査面積 75m²



調査区位置図

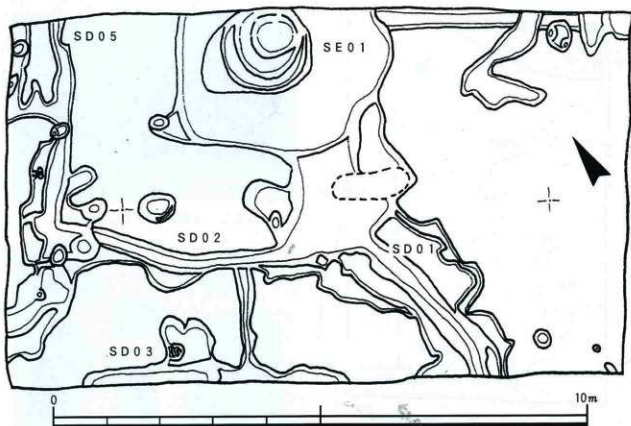
高野遺跡は縄文時代以降、様々な時代の遺構、遺物を遺す複合遺跡として周知されている。中でも古墳時代のそれは隣接する辻、岩畑遺跡とともに栗東を代表する集落遺跡として知られているが、中世の遺構、遺物についても和鏡の出土等、興味深い点が少なくない。

今回の調査では耕土直下の黄灰色バラス層上において中世の井戸や溝等の遺構が検出されている。

井戸（SE）は一辺3.8メートルの方形状の掘りかたほぼ中央に径1.8メートルの円形井戸を設けるものである。井戸枠等の設備は遺されていないが、深さ1.8メートルを測り、埋土内から黒色土器碗、土師器皿、羽釜等の土器が出土している。

溝（SD）は幅0.3メートル、深さは0.2メートルを測る。井戸と連結するものや条理方向にのびるものがみられる。やはり黒色土器碗や土師器皿が出土している。

（大崎）



②⑦ 和田古墳群

調査地 栗東町大字下戸山字和田

調査期間 1994年5月30日～6月3日

調査面積 12m²



調査地位置図

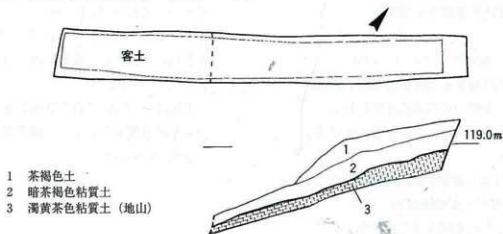
和田古墳群の発掘調査は古墳群の整備、保存を目的として安養寺山古墳群調査整備委員会により1992年8月～1993年12月の期間、2800m²の面積で実施した。古墳群は独立丘陵安養寺山の西麓尾根上標高117m～127mに分布する9基から成る後期群集墳である。今回の調査は古墳公園の園路部分に古墳状の地形



トレンチ全景

が存在したため、その確認を目的として1.2×10mのトレンチを斜面に直交するように設定し調査を実施した。その結果古墳とは認められなかった。土層は表土下に30～50cmの茶褐色土層、40～60cmの暗茶褐色粘炭土層が集積し、地上となる。遺物は出土しなかった。

(佐伯)



トレンチ平面・断面図 S=1:100

職員の活動記録

○研究会等での発表活動

近藤 広

- ・第66回滋賀県埋蔵文化財センター研究会
高野遺跡 3月

雨森智美

- ・第66回滋賀県埋蔵文化財センター研究会
縄遺跡 3月

佐伯英樹

- ・第37回埋蔵文化財研究集会
ムラと地域社会の変貌—弥生から古墳へ—
近畿1（滋賀県） 1月
- ・第66回滋賀県埋蔵文化財センター研究会
霊仙寺遺跡、野尻・伊勢遺跡 3月
- ・皇子山を守る会例会 野尻・伊勢遺跡
3月

藤岡英礼

- ・和歌山城郭調査研究会 根来寺の城郭
6月

○論文・研究報告他

近藤 広

- ・「官営工房の一端を確認 手原遺跡」
滋賀文化財だよりNO194
(財) 滋賀県文化財保護協会1994. 4. 5
- ・「各地の情報・近畿地方」
『月刊文化財発掘出土情報』
第141号～第148号
ジャパン通信社 1994. 8～1994. 3
- ・「受口状口縁をもつ近江型土器の再検討
—近江南部の受口状口縁を中心に—」
『滋賀考古』第12号 滋賀考古学研究会
1994. 8

○「はばたけ小坂」滋賀県栗太郡栗東町大字高野 (小坂行政区) 広報委員会

- ・「小坂の古代を探る1」第29号 8月
- ・「 〃 2」第30号 11月

雨森 智美

- ・「井戸から須恵器把手付長頸壺が出土」
滋賀文化財だよりNo.194

(財) 滋賀県文化財保護協会1994. 4. 5

佐伯 英樹

- ・「後期古墳を9基調査 和田古墳群」
滋賀文化財だよりNo.194
(財) 滋賀県文化財保護協会1994. 4. 5
- ・「墓前祭祀行為と思われる供献遺物の一例
栗東町和田古墳群」滋賀考古12号
滋賀考古学研究会1994. 8
- ・「近畿1（滋賀県）」『ムラと地域社会の
変貌—弥生から古墳へ—』
第37回埋蔵文化財研究集会発表資料埋蔵
文化財研究会1995. 1

藤岡 英礼

- ・「紀伊国北部における大規模山城の検討—
特に伝島山系城郭を中心として」
『和歌山地方史研究』25・26号 和歌山
地方史研究会1994. 3
- ・「伊勢国における織豊期—鈴鹿郡峯城を
中心として—」『中世城郭研究』8号
中世城郭研究会 1994. 7
- ・「大和の環濠集落—類型的把握を中心に
して—」『愛城研報告』創刊号
愛知中世城郭研究会 1994. 8
- ・「伊勢国峯城の採取瓦について」(共著)
『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
1994. 9
- ・「峯城跡」(共著)『織豊期城郭資料集
成I 織豊期城郭の瓦』 織豊期城郭
研究会1994. 11

発行日	1995年9月1日
編集・発行	(財)栗東町文化体育振興事業団 滋賀県栗太郡栗東町大字川辺390-1 〒520-30 栗東町民体育館内 TEL 0775-53-4321
印刷・製本	(株)スマイ印刷工業 滋賀県栗太郡栗東町大字川辺568-2 〒520-30 TEL 0775-52-1045 (代)